

近世名家擬古文新抄 全

特 259

274



始



特25

274



文學博士藤井乙男
山脇毅共編

近世名家擬古文新抄

四年



東京博多成象堂
大阪

例言

一この書は、中等諸學校の教課に充てんがため、賀茂眞淵の賀茂翁家集、本居宣長の玉かつま、加藤千蔭のうけらが花、村田春海の琴後集、石川雅望のしみのすみか物語、松平定信の花月草紙、石原正明の年々隨筆、藤井高尙の松屋文集、松屋後文集、松の落葉、清水濱臣の泊酒文藻、泊酒筆話、中島廣足の檀園文集より抄出し、各家の生年月の順に排列編纂せり。

一泊酒文藻は京都帝國大學所藏の寫本に、泊酒筆話は百家説林本に、檀園文集は明治二十六年出版の活版本に、その他は何れも木版原本に據れり。

一この書は、講讀上比較的興味多かるべきもの、若くは有益なるべきものを選択抄出せしものにして、教課としての目的に副はし

八 兼好法師が言葉のあげつらひ (同 卷四)……………三〇

九 書うつし物かく事 (同 卷六)……………三三

一〇 手書く事 (同 卷六)……………三四

一一 花のさだめ (同 卷六)……………三四

一二 言の然いふ本の意を知らまほしくする事 (同 卷八)……………三七

一三 講釋、會讀、聞書 (同 卷八)……………三九

一四 富士谷成章といひし人の事 (同 卷八)……………三九

一五 古よりも後の世のまされる事 (同 卷十四)……………四〇

加藤千蔭 (三六一四四)

一 秋の雨 (うけらが花 卷七 石濱の庵にて作れる)……………三六

二 千歳筐序 (同 卷七)……………三八

三 縣居の大人 (同 卷七 賀茂翁家集の序)……………四〇

四 近江國の久米氏へこたふる文 (同 第二篇 卷七)……………四二

村田春海 (四五―六三)

一 琴後集序 (琴後集)……………四四

二 知足庵の記 (同 卷十)……………四七

三 文臺の記 (同 卷十)……………四八

四 わざと法 (同 卷十 燒畫記)……………五〇

五 萬葉集後讀記序 (同 卷十一)……………五一

六 千年筐跋 (同 卷十二)……………五三

七 一柳千古にこたふる書 (同 卷十三)……………五四

八 月花のあはれをことわる詞 (同 卷十四)……………五七

九 祭芳宜園大人墓文 (同 卷十五)……………六〇

石川雅望 (六四―七二)

一 商人茶碗を碎く事 (しみのすみか物語 上卷)……………六四

二 受領の子乞食をきる事 (同 上卷)……………六五

- 三 餅を買ひて捨子を拾ふ男の事(同 下巻)……………七
- 四 學生源廣が家の童の事(同 下巻)……………六
- 五 檢非違使の下司となりたる人の事(同 下巻)……………六

松平定信 (七三―九二)

- 一 花のこと(花月草紙 卷一)……………七
- 二 月のこと(同 卷一)……………七
- 三 船を知ること(同 卷一)……………六
- 四 晴雨のこと(同 卷一)……………七
- 五 やまと歌(同 卷一)……………六
- 六 淺草の市(同 卷一)……………九
- 七 雨のこと(同 卷二)……………八
- 八 文のこと(同 卷二)……………八
- 九 くすしの術(同 卷四)……………八

- 一〇 引きのばすくせ(同 卷四)……………七
- 二 人を責むること(同 卷四)……………八
- 三 老鯉(同 卷六)……………八
- 三 寢覺の床(同 卷六)……………九

石原正明 (九三―一〇二)

- 一 雪月花(年々隨筆 一 辛酉上)……………九
- 二 まろ(同 一 辛酉上)……………九
- 三 時鳥(同 二 辛酉下)……………七
- 四 はしか(同 四 癸亥)……………六
- 五 初春(同 五 甲子)……………一〇一

藤井高尙 (一〇三―一二)

- 一 胡蝶(松屋文集 上巻)……………一〇三
- 二 夕立(同 上巻)……………一〇三

三 伯夷叔齊(同 下卷したわらび)……………一〇六

四 源氏物語小鑑序(松屋文後集上卷)……………一〇八

五 論語(松の落葉卷二)……………一〇九

六 物學び(同 卷三)……………一一一

清水濱臣 (一一三—一二六)

一 錦織齋の大人(泊酒文藻卷二 琴後集序)……………一二三

二 擣衣を聞く(同 卷三)……………一二七

三 埋火(同 卷三)……………一二七

四 推敲(泊酒筆話)……………一二九

五 健康(同)……………一三一

六 富士の嶺の歌(同)……………一三三

中島廣足 (一二七—一三七)

一 閑中春雨(櫻園文集 記文)……………一三七

目次終

二 蚊遣火(同 記文)……………一三八

三 夏の旅(同 記文)……………一三九

四 幽夕(同 記文)……………一四〇

五 驛(同 記文)……………一四一

六 漁村(同 記文)……………一四三

七 岸頭待舟(同 記文)……………一四四

八 夜學(同 記文)……………一四五

九 書(同 記文)……………一四五

近世名家擬古文新抄

賀茂真淵

元祿十年、遠江國に生まる。本姓は岡部、縣居と號す。三十七歳學に志して京都に上り、荷田東麻呂に國學を學ぶ。四十二歳、江戸に下りて子弟を教へ、五十歳、田安宗武に聘せられ、六十四歳にして致仕す。古學の先覺にして歌文に長ず。明和六年十月歿す。享年七十三。

○賀茂翁家集五卷はその歌文を集めたるものなり。

展 墓

九月十日、にはかに思ひたちて、遠江にまかる。この道、おほかたに六日なむ經べきを、いかにぞや、雲風もけしきだちて、たゞならねば、

○九月十日
延享二年、真淵四十九歳の時なり
○遠江 真淵の故郷
○こ 道
江戸より遠江國濱松までは六十餘里あり

- 戸塚、藤澤 共に横濱の西南にあり
- 大磯、小磯 共に相模灣の沿岸
- 駿河の國府 今の静岡市の舊號なり
- うつの山 静岡市の西南にあり
- 昔おぼゆれど 行き／＼て駿河國にいたりぬ、うつの山に至りて、我が入らむとする道はいとくらく細きに、鳥かへでは茂り、物心ぼそく、すゞろなるめを見ることと思ふに、修行者あひたり、かゝる道はいかでかいまするといふを見れば見し人なりけり
- (伊勢物語九段)
- 藤枝 鳴田の驛までいたりしは、亥二つばかりなりけり。大かた人もね

にはかに、五日にてをと思ひなりてけり。
 戸塚と藤澤との驛のあはひ行くほど、鮪てふ魚を、馬に二つ三つなどおほせつゝ、いくらくともなく、こなたざまにくゝさるにても、いくそばくぞと問ふに、七十あまりの馬の數なりと、いへり。これは、大磯、小磯などにて、釣りにけるになむ。
 十三日、駿河の國府にいたりぬ。今日、未の時ばかりより、村雨さゝと降りて、うつの山、雲むしてくらく、道も見えぬは、昔おぼゆれど、葛の紅葉もまだしきに、あふ人も今日はなし。うつゝの闇にて越えぬ。藤枝の驛にいたれば、日暮れて、雨はいよ／＼うつが如し。大井川はいかにぞと問はするに、さのみたはやすくは水の出で待らねば、さやは急ぎ給ふべきなどいへど、さき／＼もためしのあれば、驛にいそぎて、馬、あをたら調せさせて、雨にきほひて出でぬ。
 鳴田の驛までいたりしは、亥二つばかりなりけり。大かた人もね

- あをた 板を以て齋とし、竹のてすりをつけ、竹にて釣りたる粗末なる興
- 嶋田 大井川の東岸にあり
- 亥二つ 今の午後十時を亥といひ、十二時を子といひ、その間を四刻にわかつ亥二つは十時半頃なり
- 金谷 大井川の西岸にあり
- 七夕 七月七日の夜、庭前に机を据え、香華供物をそなへて織女星を祭る行事なり
- 懸川 今は掛川と書く、遠江國にあり
- 原川 掛川の西にあり、太田川に注ぐ一支流なり
- 岡部の家 眞淵の實家にして、濱松の南郊にあり

たるを、しひてもよほして渡りぬ。こよひは十三夜なれば、あづまの友だちは、なほ月めですらむを、この苦しきに、歌もなし。
 金谷にやどりして、ぬれたる物あぶりほす。心おちみつれば、少しをかしさも出で來ぬ。さるあひだに、風さへ大に吹き出でぬ。まことによくこそ渡りつれとて、従者もよろこびあへり。明日なむ故郷にいたるべきを、かなたにてこの川の渡瀬いで來むを待たば、七夕よりけに心いられこそせめと、うれしきこと又なし。
 十四日、空晴れて、懸川まで來るに、原川といふ河の橋おちたりとて、知る人ある方に入りてやどりて、十五日に著きぬ。人々うれしと思ひて、いかで今日しもおはしけむ。川はいかに侍りけむと、その夜に渡りたることをば、思ひかけずいぶかるなりけり。
 さて、岡部の家にゆきて、かぞいろのしるしをがむに、今年正月廿三日になむ、母はうせ給ひにければ、まだおはせぬものともおぼえ

ぬを、そなへ物の具ども白くてあるを見るも、いはむすべなく、涙のみす、みて、よ、と泣かる。去年の冬まゐり來ざりしおこたりを、くいのやちたび思ふもかひなし。御墓にまうでて、

野べの露消えせぬほどに、こはざりしわが身の

つみぞおき所なき

と申すを、たゞ松の秋風のこたふる聲をのみ聞きて去りぬ。

さるは、今年二月の三日になむ、ごみの事とて文の來れるを、おごろきて見れば、はやく正月廿三日の朝、こ、ち常ならずとて、すこしふし給ひしに、やをら起きて、手水めし、人々をよびて、一人をうしろにおきてか、へしめ、佛の方に向きて、阿彌陀ほとけを唱へ給ふ聲、二ころ三ころのうち、にねむり給へば、すなはち絶え給ひぬるを、かたへの人々も、ねむり給ふにやと思ふやうにて、なにの苦しさも見え給はず、そこらの人々、さてもめづらかにこそ終り給ひにけれ、

○くいのやちたび
さきだたぬ悔の八千度
悲しきは流るゝ水の歸
りこぬなり

(古今集十六)

○佛の方
從是西方過十萬億佛
土有世界名曰極樂
其土有佛號阿彌陀
今現在說法(阿彌陀經)

年頃神はとけをたふごみすべて、人をもおふなく、いたづき、まづしきものをばあはれみ、物乞ふかたゐなどの來れる聲を聞きては、みづから物まゐるを、くひさして與へしめなごし給ふめるむくいになむと、いひあへりごぞ。

去年の冬いたるべきを、やむごとなき事ありて、正月にこいひかはしをる程に、この三月なむ、東に御八講行はせ給ふに、東にはまれば、さるべきつかさく、にも、その事知り給はぬに、くはしくきこえよなごあれば、古き書ごもごうでて、それに筆加へなごして、やむごとなき御かたぐ、へまゐらするに、よるひるいとなくて、正月は過ぎぬ。さるを、かゝる事を聞きて、くやしなごいふも限なし。股をつかみ、足ずりして泣くも、あやなきわざかな、かくては何事をかはせむとて、うちこもりをるを、枝直、通泰など來りて、よし、今はかひなし、母君もごより佛の御事をこそたふごみ給ひつれ。御八講の事ま

○八講
法華經八卷を八人に分
ちて、一卷づゝ八座に
讀誦(ドクシユ)供養す
る法會をいふ、將軍家
に八講を行ふことあつ
て、その儀式の調査を
命ぜられしなり

○枝直
千蔭の父加藤枝直なり

うすは、おのづからなる宿世なるべし。この事きはめておろそかにし給ふまじきなり。喪のうちのおこなひにかなふべし。と勸むれば、片手は涙ながら、なほ筆とりて、書きはてて奉りぬ。その後は、急ぎのぼりても何のかひかあらむとて、こもりをるに、この九月に思ひたちぬるなりけり。

かくて、覚えぬ日數経ぬれば、東より、もよほしの文しきりなれば、十月廿日あまりに立ちなむとす。母の御墓にまかりまうしにまうでて、心のうちに、

なく／＼もわかれし時をわかれにてわかる、
親のなきぞかなしき

と思ひつゞけらる。いとしも悲しく、え立ち去るべからねば、やゝ久しくうづくまりをるを、日暮れぬ。と從者のいふに、かへり見がちにて去りぬ。

○かくて
九月廿六日に五社の遷宮ありて、眞淵はその祝詞（ノリトゴト）を作り、十月十日に阿波守國滿の家に歌會あり、かくて一月餘滞在せしなり

本居宣長

享保十五年、伊勢國松坂に生まる。鈴屋と號す。二十三歳京都に上りて儒學と醫學とを學び、二十八歳郷里に歸りて醫を業とし、傍ら古學を研究す。三十四歳賀茂眞淵の門に入り、三十八歳古事記註釋の稿を起し、三十二年を経て古事記傳四十六卷を完成す。晩年紀州侯に聘せらる。享和元年九月歿す。享年七十二。
○玉かつま十四卷はその隨筆集なり。

一 儒者の皇國の事をば知らずとてある事

儒者に皇國の事を問ふには、知らずといひて恥せせず。から國の事を問ふに、知らずといふをば、いたく恥し思ひて、知らぬ事をも、知り顔にいひ紛らはす。こは、よろづを漢めかさむとする餘りに、その身をも漢人めかして、皇國をばよその國のごともてなさむとす

るなるべしされど、なほ漢人にはあらず、皇國人なるに、儒者とあらむ者の、おのが國の事、知らであるべきわざかは。但し、皇國の人にむかひては、さあらむも漢人めきてよかんめれど、若し、漢國の問ひたらむには、我はそなたの國の事はよく知れれども、我が國の事は知らずとは、さすがにえいひたらじをや。若し、さもいひたらむには、己が國の事をだにえ知らぬ儒者の、いかでか、ひこの國の事をば知るべきとて、手をうちて、いたく笑ひつべし。

二 あらたなる説を出す事

近き世、學問の道ひらけて、大かた、萬づのとりまかなひ、さこく賢くなりぬるから、とりぐに新たなるときごとを出す人おほく、そのときごとよろしければ、世にもてはやさるゝによりて、なべての學者、いまだよくもこゝのはぬ程より、われ劣らじと、世にことなる

珍しきときごとを出して、人の耳をおどろかすこと、今の世のならひなり。

その中には、ずるぶんによろしきこと、まれには出でくめれど、大かた、いまだしき學者の、心はやりていひ出づる事は、たゞ、人にまさらむ勝たむの心にて、かるくしく、まへしりへをもよくも考へあはさず、思ひよれるまゝに、うち出づる故に、多くは、なかくなるいみじきひがここのみなり。

すべて、新たなるときごとを出すは、いと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よくたしかなるより、ごころをさらへ、いづくまでも行きどほりて、たがふ所なく、動くまじきにあらずば、たやすくは出ずまじきわざなり。その時には、うけばりてよしと思ふも、程へて後に、いまたびよく思へば、なほわろかりけりし、我ながらだに思ひならるゝ事の多きぞかし。

三 あらたにいひ出でたる説

大かた、世の常にことなる新しきことごとを起す時には、よきあしきをいはず、まづ一わたりは、世の中の學者に憎まれ、そしらるゝものなり。あるは、おのがもとより據り來つるときごとこといたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、始よりひたぶるに捨てて、取り上げざるものもあり。あるは、心の内には、げにこ思ふふしも多くあるものから、さすがに、近き人のことに従はむことこのねたくて、よしともあしともいはで、たゞうけぬ顔して過ぐすたぐひもあり。あるは、ねたむ心のすゝめるは、心にはよしと思ひながら、その中の疵をあなたがちに求め出でて、すべてをいひ消たむごかまふる者もあり。

大かた、ふるきことごとをば、十が中に七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、わづかに二つ三つの取るべき所のあしきを取りたてて、力のかぎり助け用ゐむとし、新しきは、十に八つ九つよくても、一つ二つのわるきことを言ひたてて、八つ九つのよきことをもおし消ちて、力のかぎりは、我も用ゐず、人にも用ゐさせじとする、こは大かたの學者のならひなり。

然れども、又まれ／＼には、あらたなるときごとのよきを聞きては、古きがあしきことをさとりて、すみやかに改めしたが、ふたぐひも無きにはあらず。古きをいかにぞや思ひて、かくはあらじかごまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながらさであるなどは、あらたなるよきことごとを聞きては、かくてこそは、こいみじく喜びつゝ、たちまちに従ふたぐひもありかし。

大かた、新たなるときごとは、いかによくても、すみやかに用ゐる人まれなるものなれど、よきは、年をへても、おのづから、つひには

世の人の従ふものにて、あまねく用ゐらるれば、その時に至りては始にねたみそしりしこともがらも、心には悔しく思へど、おくれればせに従はむも、なほねたく、人わろくおぼえて、快からずながら、古きを守りてやむこともがらも多かり。

しか、世の中のあげつらひ定まりて、皆人のしたがつ世になりては、始よりすみやかに改め従ひつる人は、かしこく心ささく思はれ、古きにかゝづらひて、ごかくごまごほれる人は、心おそく、いふかひなく思はるゝわざぞかし。

四 おのが物學びのありしやう

おのれ、いごきなかりし程より、書を讀むことをなむ、よろづよりも面白く思ひて讀みける。さるは、はかしくしく師に就きて、わざと學問すこにもあらず、何ご心ざすこもなく、そのすぢご定めたる

○はたちあまり
寶曆二年、二十三歳の時京に上りて、儒學を堀景山に學び、その翌々年より醫術を武川幸順に學ぶ

○父
江戸大傳馬町に松坂木綿の店を經營せしが、元文五年没せしかば、宣長の義兄定治跡をつげり

○江戸にありし家のなりはひ云々
宣長二十二歳の時、義兄定治は江戸神田紺屋町の店に没せしかば、その遺産四百兩の利子を唯一の收入とするに至りしなり

○改觀抄
釋契沖の著にして三卷あり、百人一首の註釋書なり

○契沖
攝津國尼崎の人、眞言宗の僧侶にして、阿闍梨の位を受く、著書頗る多く、近世國學の泰斗たり、元祿十四年正月没す、年六十二

かたも無くて、たゞからのやまごのくさくさの書を、有るにまかせ、得るにまかせて、古き近きをもいはず、何くれご讀みける程に、十七八なりし程より、歌よままほしく思ふ心出で來て、よみ始めけるを、それはた、師に従ひて學べるにもあらず、人に見するこごなごもせず、たゞひごりよみ出づるばかりなりき、集どもも、古き近き、これかれご見て、かたの如く、今の世のよみごまなりき。

かくて、はたちあまりなりし程、學問しにこて、京になむのぼりける。さるは、十一の年、父におくれしにあはせて、江戸にありし家のなりはひをさへに失ひたりし程にて、母なりし人のおもむけにて、くすしのわざを習ひ、又そのために、世のつねの儒學をもせむごてなりけり。

さて、京に在りし程に、百人一首の改觀抄を人に借りて見て、はじめ契沖ごいひし人の説を知り、その世にすぐれたる程をも知り

○餘材抄
古今和歌集の註釋書に

して、十卷あり

○勢語臆斷
伊勢物語の註釋書にし

て、四卷あり

○國にかへる

寶曆七年十月、二十八

歳にして、生地伊勢國

松坂に歸り、小兒科の

醫師を業とせり

○冠辭考

賀茂真淵の著にして、

十卷あり、枕詞を解釋

せる書なり、寶曆七年

出版せらる

○縣居の大人

賀茂真淵

○契沖が萬葉の説

萬葉代匠記のこと

て、この人の著したるもの、餘材抄、勢語臆斷などをはじめ、その外も、
つぎ／＼にもごめ出でて見ける程に、すべて、歌まなびのすぢの善
き悪しきけぢめをも、やう／＼にわきまへささりつ。

さて後國にかへりたりし頃、江戸よりのぼれりし人の、近き頃出
でたりとて、冠辭考といふものを見せたるにぞ、縣居の大人の御名
をも、始めて知りける。かくて、その書ははじめに一わたり見しには、さ
らに思ひもかけぬ事のみにして、あまりこと遠く、あやしきやうに
覚えて、さらに信ずる心はあらざりしかど、なほあるやうあるべし
と思ひて、立ちかへり今一たび見れば、まれ／＼には、げにさもやこ
覺ゆるふし／＼も出で來ければ、又立ちかへり見るに、いよ／＼げ
にぞ覺ゆること多くなりて、見る度に信ずる心の出で來つゝ、つひ
に古ぶりの心言葉の、まことに然ることをささりぬ。かくて後に思
ひくらぶれば、かの契沖が萬葉のときごとは、なほいまだしき事の

みぞ多かりける。

○道のまなび

古道を研究する學問

○神書

神道の書

○一とせ

寶曆十三年のことにし

て、真淵は六十七歳、

宣長は三十四歳の時な

り

○田安の殿

真淵は延享三年、五十

歳にして、吉宗將軍の

子田安中納言宗武に仕

ふ、宗武は國學を好み、
和歌に巧にして、著書
多し

さて又、道のまなびは、まづはじめより神書といふすぢのもの、古
き近き、これやかれやと讀みつるを、はたちばかりの程より、わきて
志ありしかど、ごりたてて、わざと學ぶことは無かりしに、京にのぼ
りては、わざとも學ばむと、志は進みぬるを、かの契沖が歌ぶみのこ
きごごにならずらへて、皇國の古の意こころをおもふに、世に神道者といふ
ものの説くおもむきは、皆いたくたがへりご、はやくささりぬれば、
師とたのむべき人も無かりし程に、われいかで、古のまことこのむね
を考へ出でむと思ふ志深かりしにあはせて、かの冠辭考を得て、か
へす／＼讀み味ふほごに、いよ／＼志深くなりつゝ、この大人を慕ふ
心、日にそへてせちなりしに、一とせ、この大人、田安の殿の仰せ事を
承り給ひて、この伊勢國より大和、山城など、こゝかしこと尋ねめぐ
られしことこのありし折、この松坂の里にも、二日三日さゞまり給へ

○又一夜
五月二十五日のことなり

りしを、さることつゆ知らで、後に聞きて、いみじく口惜しかりしを、かへるさまにも、又一夜やどり給へるをうかゞひ待ちて、いさゝくうれしく、いそぎやどりにまうでて、始めてまみえ奉りたりき。さてつひに、名簿を奉りて、教をうけたまはることにはなりたりきかし。

五 縣居の大人の御さとし言

宣長、三十あまりなりし程、縣居の大人の教をうけたまはりそめし頃より、古事記の註釋をも、のせむの志ありて、その事、大人にもきこえけるに、さとし給へりしやうは、われも、もとより神の御典をこかむと思ふ志あるを、そはまづ、からごころを清くはなれて、古のまことこの意を尋ねえずはあるべからず、然るに、その古の意を得むことは、古言を得たる上ならでは能はず、古言を得むことは、萬葉をよく明らむるにこそあれ、さる故に、われはまづ、もはら萬葉を明らめ

○古事記

天地開闢より推古天皇までの事蹟を記したる我が國最古の史籍にして、和銅四年太安麻呂の撰述せしもの、三卷あり

○萬葉

萬葉集二十卷は、仁徳天皇より淳仁天皇まで、凡そ四百年間の和歌、四千四百九十六首を集めし歌集なり

むとすする程に、すでに年老いて、残りのよはひ、今いくばくもあらざれば、神の御典をこくまでに至ること得ざるを、いましは年さかりにて、行先長ければ、今より忘ることなく、いそしみ學びなば、その志遂ぐることあるべし、たゞし、世の中の物學ぶともがらを見るに、皆ひきき所を経ずて、まだきに高き所にのぼらむとすする程に、ひきき所をだに得ること能はず、まして高き所は得べきやうなければ、皆ひがここのみすめり、この旨を忘れず、心にしめて、先づひきき所よりよくかため置きてこそ、高き所にはのぼるべきわざなれ、わがいまだ神の御典をえとかがざるは、もはらこの故ぞゆめ、しなを越えて、まだきに高き所をな望みそと、いとねもごろになむ、いましめ諭し給ひたりし、この御さとし言の、いとたふとく覺えけるまゝに、いよいよ萬葉集に心をそめて、深く考へ、くりかへし問ひたゞして、古の意言葉をさとり得てみれば、まことに、世の物知り人といふものの、

神の御典とける趣は、皆あらぬからごころのみにして、さらにまこと
この意はえ得ぬものになむありける。

六 わが教へ子にいましめおくやう

吾にしたがひて物學ばむともがらも、わが後に、又よき考の出で
きたらむには、必ずわがとぎごごにななづみそ。わがあしき故をい
ひて、よき考をひろめよ。すべて、おのが人を教ふるは、道を明かにせ
むとなれば、かにもかくにも、道を明かにせむぞ、吾を用ゐるにはあ
りける。道を思はで、いたづらに吾をたふこまむは、わが心にあらざ
るぞかし。

七 ひとむきにかたよる事の

あげつらひ

世の物知り人の、ひとのとぎごごの悪しきをこがめず、一むきにか
たよらず、此をも彼をも棄てぬさまにあげつらひをなすは、多く
は、おのが思ひごりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくかなへ
むとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ、世の人はい
かにそしることも、わが思ふすぢを枉げて従ふべきことにはあらず。
人のほめそしりにはかゝはるまじきわざぞ。

大かた、一むきにかたよりて、あだしとぎごごをばわろしごごが
むるをば、心せばくよからぬごごとし、ひとむきにはかたよらず、あ
だしとぎごごをもわろしごごはいはぬを、心ひろく、おいらかにてよ
しごするは、なべての人の心なめれど、かならず、それ、さしもよき事
にもあらず。よる所定まりて、そを深く信ずる心ならば、必ずひとむ
きにこそよるべけれ。それにたがへるすぢをばさるべきにあらず。
よしごしてよる所に異なるは、みな悪しきなり。此よければ、彼は必

ず悪しきことわりぞかし。

然るを、此もよし、また彼も悪しからずといふは、よる所定まらず、信ずべき所を深く信ぜざるものなり。よる所定まりて、そを信ずる心の深ければ、それに異なるすぢの悪しきことをば、おのづからとがめざるこそ能はず。これ信ずる所を信ずるまめ心なり。人はいかに思ふらむ。われは一むきにかたよりて、あだしときごとをばわろしごとがむるも、必ずわるしとは思はずなむ。

八 兼好法師が言葉のあげつらひ

兼好法師が徒然草に、花は盛り、月はくまなきをのみ見るものか、はごかいへるは、いかにぞや。古の歌ごもに、花は盛りなる、月はくまなきを見たるよりも、花のそこには風をかこち、月の夜は雲をいごひ、あるは待ち惜しむ心づくしをよめるぞ多くて、心深きも、こと

○花は盛りに
徒然草百三十七段に出
づ

にさる歌に多かるは、みな、花は盛りをのどかに見まほしく、月はくまなからむことを思ふ心のせちなるからこそ、さもえあらぬを歎きたるなれ。いづこの歌にかは、花に風を待ち、月に雲をねがひたるはあらむ。人の心は、うれしき事はさしも深くは覚えぬものにて、ただ心にかなはぬ事ぞ、深く身にしみては覺ゆるわざなれば、すべてうれしきをよめる歌には、心深きは少くて、心にかなはぬすぢを悲しみうれへたるに、あはれなるは多きぞかし。さりて、わびしく悲しきを、みやびたりて願はむは、人のまことの情ならめや。

又、同じ法師の、人はよそぢに足らで死なむこそ、めやすかるべけれ、といへるなどは、中ごろよりこなたの人の、みな歌にもよみ、つねにもいふすぢにて、命長からむことを願ふをば、心ぎたなきこととし、早く死ぬるをめやすきことにいひ、この世を厭ひすつるをいさぎよきこととするは、これみな佛の道にへつらへるものにて、おほ

○人はよそぢに
徒然草七段に出づ

くはいつはりなり。言ことばにこそさもいへ、心のうちには、誰かはさは思はむ。たとひ、まれ／＼には、まことにしか思ふ人のあらむも、もよりの眞心にはあらず、佛の教にまごへるなり。

人の眞心は、いかにわびしき身も、早く死なばやさは思はず、長く生きたらむことをこそ願ひたれ。中ごろよりこなたの歌さは、その心うらうへなり。すべて、何事も、なべての世の人の眞心にさかひて、異なるをよき事にするは、外國あつちのならひのうつれるにて、心をつくりかざれるものと知るべし。

九 書うつし物かく事

ふみを寫すに、同じくだりのうち、あるは並べるくだりなどに、同じ詞のある時は、見まがへて、その間なる詞どもを寫しもらすこと、常によくあるわざなり。又一ひらと思ひて、二ひら重ねてかへして

は、その間一ひらを、皆がらおとすこともあり。これら、常に心すべきわざなり。又よく似て見まがへ易き文字などは、ここにまがふまじく、たしかに書くべきなり。これは寫しがきのみにもあらず、大かた物書くに心得べき事ぞ。

すべて、物を書くは、事のこゝろを示さむとてなれば、おふなく文字さだかにこそ書かまほしけれ。さるを、ひたすら筆の勢を見せむとのみしたるは、いかなる事とも讀みこき難きが世に多かる、あぢきなきわざなり。

常に書きかはす消息せきぞう文なども、文字讀みがたくては、いひやるすぢ行きとほらず。讀む人はた苦しみて、頭かたぶけつゝ、かへさひ讀めども、つひに讀み得ずなどしては、こゝ讀みがたしとかへし問はむも、さすがになめしきやうなれば、たゞおしはかりに心得ては、事たがひもするぞかし。

一〇 手書く事

よろづよりも、手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ、學問などする人は、ここに手悪しくては、心おこりのせらるゝを、それ何かは苦しからむといふも、一わたりここわりはさることながら、なほ飽かず打ちあはぬ心地ぞするや。

宣長、いとつたなくて、常に筆さるたびに、いと口惜しう、いふかひなく覺ゆるを、人の乞ふまゝに、おもなく短冊一ひらなど書き出でて見るにも、我ながらだに、いとかたはに見苦しう、かたくななるを、人いかに見るらむと、はづかしく胸いたくて、若かりし程に、なごて手習ひはせざりけむと、いみじうくやしくなむ。

一一 花のさだめ

花はさくら、櫻は、山櫻の葉あかく照りて、細きがまばらにまじりて、花しげく咲きたるは、又たぐふべき物も無く、うき世の物とも思はれず、葉青くて花のまばらなるは、こよなくおくれたり。大かた、山櫻といふ中にも、しなぐのありて、こまかに見れば、一本ごとに、いさゝかかはれる所ありて、またく同じきは無きやうなり。すべて、曇れる日の空に見あげたるは、花の色あざやかならず。松も何も、青やかに茂りたるこなたに咲けるは、色はえてここに見ゆ。空清く晴れたる日、日影のさす方より見たるは、にほひこよなくて、おなじ花とも覺えぬまでなむ。朝日はさらなり、夕ばえも。

梅は紅梅、開けさしたる程ぞ、いとめでたきを、さかりになるまゝに、やうくしらせゆきて、見どころ無くなるこそ、いと口惜しけれ。櫻のさける頃までも、散ること知らで、むげににほひ無く、ねびれしぼみて残りたるを見れば、げに、ありて世の中は、何事も皆かくこそ

○ありて世の中
残りなく散るぞめでた
き櫻花ありて世の中は
てのうければ

(古今集二)

一〇 手書く事 一一 花のさだめ

と見る春ごとに思ひ知らるかし。白きはすべて香こそあれ、見る目は品おくれたり。大かた、梅の花は、ちひさき枝を物にさして近く見たるぞ、梢ながらよりはまされる。

桃の花は、あまた咲きつゞきたるを、遠く見たるはよし、近くてはひなびたり。山吹、かきつばた、撫子、萩、薄、女郎花など、ごりくゝにゆでたし。菊も、よき程につくろひたるこそよけれ、あまりうるはしく、したゝかに造りなしたるは、なかゝに品なく、なつかしからず。つゝ、野山に多く咲きたるは、目覺むる心地す。海棠といふもの、からめきて、こまやかにうるはしき花なり。

そも、かくいふは、皆おのが思ふ心にこそあれ、人は又思ふ心こそなんべければ、ひとやうに定むべきわざにはあらず。又今やうの、世の人のもてはやすめる花ごも、よに多かるを、數へ出でぬは、殊更めきたるやうなれど、歌にもよみたららず、古き物にも見えたる

ことなきは、心のなしにや、なつかしからず覺ゆかし。されど、それはた、ひとやうなるひが心にやあらむ。

一一 言の然いふ本の意を知

らまほしくする事

物學びするともがら、古き言のしかいふもこのこゝろを知らまほしくして、人にも先づ問ふこと常なり。しかいふ本の意とは、たとへば、天あめといふはいかなる意ぞ、地つちといふはいかなる意ぞといふたぐひなり。これも學びの一つにて、さもあるべきことにはあれども、さしあたりて、むねとすべきわざにはあらず。大かた、古の言は、しかいふ本の意を知らむよりは、古人の用ゐたる意を、よく明らめ知るべきなり。用ゐたる意をだによく明らめなば、しかいふ本の意は、知らでもあるべきなり。

そも、よろづのこゝ、まづその本をよく明らめて、末をば後にすべきは論なれど、しかのみにもあらぬわざにて、事のさまによりては、末よりまづ物して、後に本へはさかのぼるべきもあるぞかし。大かた、言の本の意は知りたきわざにて、われ考へ得たりと思ふも、當れりや、あらずや、定め難く、多くは當りがたきわざなり。されば、言の葉の學問は、その本の意を知ることばのどめおきて、かへすがへすも、古の人のつかひたる意を、心をつけて、よく明らむべきわざなり。たゞひその本の意はよく明らめたらむにても、如何なる所に使ひたりといふことを知らずでは、何のかひもなく、おのが歌文に用ゐるにも、ひがこゝのあるなり。今の世、古學びをするも、がらなど、殊にすこし遠き言といへば、まづしかいふ本の意を知らむとのみして、用ゐたる意をば考へむともせざる故に、おのが使ふに、いみじきひがこゝのみ多きぞかし。

すべて、言は、しかいふ本の意と用ゐたる意とは、多くはひとしからぬものなり。たゞへば、なか／＼に「こいふ言は、もこ、こなたへもかなたへもつかず、なからなる」意の言なれども、用ゐたる意は、たゞ「なまじひに」「こいふ意、又うつりては」「かへりて」「こいふ意にも用ゐたり。然るを、言の本によりて、うちまかせて、なからなる意に用ゐては、たがふなり。又「心ぐるし」「こいふ言は、今の世の言に、氣の毒なる」「こいふ意に用ゐたるを、言のまゝに、心の苦しきこゝに用ゐては、たがへり。されば、これらにて、よろづの言をもなづらへ心得て、まづ古に用ゐたるやうを先として、明らめ知るべし。言の本にのみよりては、なかなかに古にたがふこゝ多かるべしかし。

一三 講釋、會讀、聞書

いづれの道の學びにも、講釋こうしやくとて、古き書の心をこき聞かするを

聞くこと常なり。

さて、この講釋といふわざは、師のいふ事をのみ頼みて、己が心もて考ふることなければ、物學びの爲にやくなしとて、今やうの儒者などは、宜しからぬわざとして、會讀といふ事をぞすなる。そは講釋とはやうかはりて、各みづから考へて、思ひ得たるさまをいひ試み、心得がたきふしをば問ひ聞き、かへさひもして、かたみにあげつらひ定むるわざなれば、げに學問の爲に宜しきわざとは聞えたれど、それさしもえあらず。

世の中にこのわざを見るに、大かた、始の程こそ、こゝかしこ、かへさひあげつらひなど、さるべきさまに見ゆれ、度重なれば、おのづから怠りつゝ、一ひらにても多く讀みもてゆかむとする程に、いかにぞや覺ゆるふしく、をも、多くなほざりに過ぐすならひにて、大かた、ひとり居て讀むにもかはること無ければ、殊につごひたる

かひも無き中に、うひ學びのごもがらなどは、いさゝかもみづから考へ得る力は無きに、これもかれも聞えぬ事がちなるを、ことごとくに問ひ出でむこともつゝ、ましくて、聞えぬながらに、さて過ぐしやるめれば、さるごもがらなどの爲には、なほ講釋ぞまさりてはありける。

されど、講釋も、たゞ師のいふ事をのみ頼みて、おのれ力入れむごも思はず、聞くことをのみむねとせむは、いふかひなく口惜しきわざなり。まづ下見といふ事をよくして、始より、力の限りは、みづからごかく思ひめぐらし、聞えがたき所々は、ここに心を入れて、かへさひ讀みおけば、聞く時に、心のごまる故に、ささるごもこよなくして、忘れぬものなり。さて、聞きて家に歸りたらむにも、やがてかへり見といふ事をして、聞きたりし趣を思ひ出でて味ふべし。

また、聞書といひて、聞く聞くその趣を書きしるすわざあり。そは、

中に忘れもしぬべきふしなごを、をり／＼はいさゝかづつ記しお
かむは、さもあるべきわざなるを、始より師のいふまゝに、一言も漏
らさじと、筆はなたず、ことごとくに書きつゞくるかし。そも／＼、講釋
は、よく心をしづめて、事の心をこまやかに聞き得べきわざなるに、
この聞書すこては、聞くかたよりも、おくれじと書くかたに心は急
がれてあわたゝしきに、ことによく聞くべきふしも、かいまぎれて
聞き漏らし、あるはあらぬすぢに聞きひがめもするぞかし。然るに、
これをしもしみじきわざに思ひて、いかでわれこまかに記しさら
むと、たゞこれにのみ心を入れてつとむる程に、もはら聞書のため
の講釋になるたぐひも多かるは、いと／＼あぢきなきならひにな
むありける。

一四 富士谷成章といひし人の事

○富士谷成章
皆川淇園の弟にして、
京都の國學者なり、安
永八年十月歿す、年四
十二

○かざし抄
挿頭抄三卷は副詞、感
動詞、代名詞の類を解
説したる書なり

○みゆひ抄
脚結抄五卷は、てにを
はを解説したる書にし
て、安永七年の出版な
り

○六運圖略
國語法を圖説したるも
のなり

近き頃、京に、富士谷專右衛門成章といふ人ありける、それが作れ
るかざし抄、あゆひ抄、六運圖略などいふ書どもを見て驚かれぬ。そ
れよりさきにも、さる人ありとはほの聞きたりしかど、例の今やう
のかいなでの歌よみならむと、耳もたゞざりしを、この書どもを見
てぞ、知れる人にあるやう問ひしかば、この近き程みまかりぬと聞
きて、又驚かれぬ。

そも／＼、この頃の歌よみどもは、少し人にもまさりて用ゐらる
るばかりにもなれば、おのれひとりこの道得たる顔して、心やり高
ぶるめれど、よめる歌、書ける文、いへるさきことなどを聞けば、ひが
ことのみ多く、皆いとまだしきものにて、これはと覺ゆるはいさか
たく、ましてぬけ出でたるは絶えて無き世に、この富士谷は、さるた
ぐひにあらず。また古きすぢをこらへて、みだりに高きことのみい
ふともがら、はた世に多かるを、さるたぐひにもあらず。萬葉よりあ

なたのことは、いかゞあらむ、知らず。六運の辨にいへる趣を見るに、古今集よりこなたさまの歌のやうをよく見知れることは、大かた近き世にならぶ人あらじとぞ覺ゆる。北邊集きたのへといひて、歌の集もあるを見たるに、よめる歌は、さしもすぐれたりとは無けれど、今の世の歌よみのやうなるひがことは、をさく見えずなむありける。さもあたらしき人の、早くもうせぬることよ。その子の專右衛門といふも、まだ年若けれど、心いれて、わざこの道ものすと聞くは、父のけはひも添はりたらむと、頼もしく覺ゆかし。それが物したる書ごもも、これかれと見えしらがふめり。

一五 古よりも後の世のまされる事

古よりも後の世のまされること、よろづの物にも事にもおほし。その一つをいはむに、古は、橘をならびなき物にしてめでつるを、近

○專右衛門
名を御杖といふ、父の
學をつぎて國學和歌に
通ず、文政六年十二月
歿す、年五十六

き世には、蜜柑といふものありて、この蜜柑にくらぶれば、橘は數にもあらずけおされたり。その外、柑子、柚、九年母、橙などのたぐひ多き中に、蜜柑ぞ味ここにすぐれて、中にも橘によく似て、こよなくまされるものなり。この一つにて推しはかるべし。或は、古にはなくて今はある物も多く、古はわろくて今のはよきたぐひ多し。

これをもて思へば、今より後も、又いかにあらむ。今にまされる物おほく出で來べし。今の心にて思へば、古はよろづに事足らず、あかぬ事おほかりけむ。されど、その世には、さはおぼえずやありけむ。今より後、また物の多くよきが出で來む世には、今をもしか思ふべけれど、今の人事足らずとはおぼえぬが如し。

加藤千蔭

享保二十年、江戸に生まる。姓は橋芳宜園と號す。江戸八丁堀の與力にして、早くより賀茂眞淵の門に入りて古學を學び、歌文に長ず。又假名文字の名手にして、世に千蔭流と稱す。五十四歳家職を辭し、文化五年九月歿す。享年七十四。

○うけらが花七卷、同第二篇七卷はその歌文を集めたるものなり。

一 秋の雨

葉月二十日あまり、秋のけはひのなつかしく、例の隅田川のほとり、石濱の庵にゆきて宿りぬ。有明の月のにほひも、霧たちわたる曙のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日なむ、ここにあはれは深かりける。もこより、萱ふける庵なれば、音だになくて、軒の雫の三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろ／＼と散るもあはれなり。水のおもては、動くともなくて、

○石濱
今の東京市の東北隅、隅田川の西岸なる船場町のあたりをいへり

○秩父の山
武蔵國の西部にありて、隅田川の水源なり

鏡の如くなるに、雲の濃きうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。水脈の一すぢは、さしひく汐にもまじらで、こはに花田の色に流れいにて、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならむ。うち向ふ岸の榛原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるは、さすがにほのかに見えて、そのひま／＼より長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やう／＼に薄墨もてかきけちたらむ如く、いとしもはるけきは、たゞ靡かぬ煙このみぞ見ゆる。こゝかしこより鳥の飛び行きつゝ、時の鷺の翅おもげに起き出でて、河の瀬の眞菰におり立てば、みさごの群れ來て、水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より、筏師の蓑笠きて、棹を筏の上に横たへ、おのれたむだきて、思ふこそなげにて居り。筏は、水のまに／＼流れ行くもしづけし。渡守、舟さしいだせば、大笠かたぶけて渡り行く人の、やがて堤をあるくさまも、繪によ

く似たり。

○筑波嶺
筑波山は關東平野の東北隅にあり、石濱よりも東北に見ゆ

○水分の神
水神の森をいふ、隅田川の東岸にありて、石濱よりは東北に見ゆ

すべて、ひと日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風かよひ來て、岸の木立も、長き堤も、あるはあらはれ、あるは隠れて、限なき青海原に向ひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくて、やゝ夕暮ちかくなりゆけば、群鳥のおのがじし時もしむるに、雁の一つら二つらわたり行くなど、えもいはむ方なし。暮れはてても、なほ行く水の色のみ遠白くのこりて、川添小田にはへる水分の神のみ火の、海人のいさりともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田河たが墨がきのす
さびなるらむ

○千歳筐ちとせのかたむ

一 千歳筐序

手書くわざは、いにしへ物のまじるしに出で來はじまりたるなれば、よきあしき、あげつらふべくもあらぬすぢなるものから、いにしへ人の書けるあこを見れば、心さへ清らにおぼゆるは、いかなる故にかと思ふに、その古人のすなほなる真心の、おのづから筆にあらはるゝによりてなりけり。

○縣居の大人
千蔭の師賀茂眞淵

わが縣居の大人は、古の學びの道をしも導き給ふを真心にて、手書くわざをむねとせられつるにはあらねど、書き給へるあこの、おのづから古人のさまにかよひて、わがさもがらの、人の跡をならひて、その形をうつし得るたぐひにしもあらぬは、真心の古人に等しかればなるべし。

わが友藤原千任、その書き給へるをひろひ集めて、板にゑりて、世に傳へまくするよ。こもまた、深く古學びをたふとめるがあまりなりけり。かれ、そのはしにしるしつ。

三 縣居の大人

○若かりしより
寛延元年、十四歳の時、
真淵の門に入れり

千蔭、いと若かりしより、縣居の大人にしたがひて、常の御有様のたまへりし事を、親しく見もし、聞きもしつるに、大人は、今の世の人は異にして、うち見には、さかしき方はおくれて、心おそき方に思はれしかど、たまさかにいひ出で給へることに、敷島のやまご心をあらはし、一言としてみやびならざることなかりき筆とりて物書き給ふを見るに、五百とせも經にけむ筆の跡の如くなむありける。こは、あまた年、夜晝となく、古こごをのみ心にしめて、家居より調度に至るまで、古によりて、いさゝめにも、後の世の事を耳にふれ、心にさめ給はざりしかば、おのづから古人の心になりもてゆきて、その心よりいひ出でもし、物書きもし給ひしによりてこそ、しかありけるならめ。

○荷田の東麻呂

又春滿とも書く、京都の南稻荷山の洞官なり、日本紀、萬葉集を初め、國史、律令格式の書に精し、元文元年七月歿す、年六十九、

○藍より青し

青出於藍而青於藍、氷水爲之而寒於水、(荀子勸學篇)

○古事ぶみ

古事記のこと

○祝詞

神前に告げ白す詞なり

○催馬樂

もと馬子歌として民間に行はれたる民謡なりしを、平安朝に至りて宮中に入りて宴遊に歌はれ、遂に式樂に採定せらるゝに至りしものなり

かく古につとめ給ひし中にも、歌をば、こごに心高くもてつけてものせられたれば、歌一つよみ出で給へるにも、深くかうがへ、あまた度あぢはへて、によび出でられしなり。

歌のさまは、始と中頃と末と、三つのきざみありき。始の程は、物學び給へる荷田の東麻呂宿禰の歌のさまにかよひて、花やぎ、たよわきさまなりしを、中頃より、みづからの一つの姿となりて、みやびにして調べ高く、しかもを、しきすぢをよみ出され、齡の末に至りては、いたく思ひあがりて、設けず飾らず、たれも心の及びがたきふしをのみ作られき。その始の程なるも、藍より青しと、宿禰よりも立ちまさりてぞ聞えし。折にふれては、古事ぶみのいさあがれる世のさまなる、又古の祝詞になすらへたる、あるは中つ世の催馬樂の謠ひ物をまねびたる、あるは物語ぶみによりたるなごは、その代々の人のいひ出せるに異なることなくなむありける。

○遠江國敷智郡
敷智郡は今廢せられて濱名郡に合併す、濱松庄は今の濱松市なり、もと岡部郷といひしは濱松の南郊なり

○享保十八年
眞淵三十七歳の時にして、寛保三年は四十七歳、延享三年は五十歳なり、但し眞淵の江戸に行きしは元文三年、四十歳の時なり

○田安の殿
田安中納言宗武

○寶曆十年
眞淵六十四歳の年の十一月なり

○東海寺
東京市の南品川町にあり、臨濟宗の大寺にして、少林寺はその境内にあり

○賀茂氏のかばね
姓(カバネ)は上代の官職名なりしが、後家筋

そもく、大人は、賀茂の縣主成助のすゑ、遠江の國敷智の郡濱松の庄岡部の郷なる賀茂の新宮の神主定信といへるが子にて、元祿の十年、岡部の郷にて生まれ給ひて、享保の十八年に、京にのぼりて、荷田の宿禰の教をうけ給ひ、寛保の三年に、江戸にまゐ來給ひしを、延享の三年に、田安の殿より召され給ひて、古の書の道の博士とし、殊にめでさせられ給へりき。大人、よはひ老いて、申文奉り、寶曆の十年に仕をしぞきて、明和の六年神無月晦日に、七十あまり三つの齡にてみまかり給ひ、江戸の南、荏原えはらの郡品川の東海寺なる少林寺の山にはふりぬ。

眞淵といへる御名は、敷智の郡の名より思ひよりて、つき給へりぞ。縣居とは、うつせみの世にましし時、庭を田居のさまに作りて、賀茂氏のかばねにもよしあればとて、みづから家の名におほせられたるなりけり。

四 近江國の久米氏へこたふる文

の傳を分つ號となれり、賀茂氏の姓縣主はもと御料田の事を掌る職名なりしが、子孫の職を世襲して、單に姓として残れるなり

○御國の郁子
近江國より郁子二籠を禁中へ貢進すること、延喜式に見ゆ

○正輔
大堀正輔は近江國彦根の人なり、京都に出でて賀茂秀鷹の門に入り、江戸に行きて千蔭に和歌及び書法を學ぶ

○奥島
奥島は琵琶湖中最も大なる島にして、蒲生郡八幡町の北にあり、その東岸の王濱(オノハマ)に産する郁子を、十一月一日に禁中に獻せしといふ

去年の神無月ばかりにおごろかい給へる御せうそこ、いごもいごもうれしう、はた御國の郁子は、古よりかしこき大みけにも奉りしと聞きわたり侍れば、ふるこご好み侍るくせにて、正輔ぬしへ物語せしを聞かせ給ひて、奥島わたりへあつらへおき給ひつるをも、て來て參らせしとて見せ給へるなむ、こよなうよろこび侍りぬるよはひ延ぶご聞き侍るはさるものにて、名たゝるものを手にふれ侍るこそ、かしこみおぼえ侍れ。

えまほしと思ひしものもわがせこにむべなはずばいかで見るべき

ごみにかしこまりきこえまゐらすべかりしを、正輔ぬしも見および給ふごごく、老いしれたる身には、いごたへがたきばかり、くさぐ

○正輔ぬしへも云々
この消息は大畑正輔に
持たせやりたりと見ゆ

さか、づらふ事のみ侍りて、年さへかへり侍りつるを、いかゞかう
じあなづり給ふらむと思ふく、今日までにおこたり侍るなめげ
さは、ゆるしたまはりなむ。正輔ぬしへもきこえ侍りつるを聞かせ
給へかし。なほ寒けさ暖かさうちまじり侍りぬるを、御心し給ひて
よ。あなかしこ。

かへすく、正輔ぬしのたまふまゝに、近き頃の心ずさび、一
つ二つ書きてまゐらせつ。いさゝかのいさまに書き侍りつれ
ば、いさゝくわろかんめり。

村田春海

延享三年、江戸に生まる。琴後翁又は錦織齋と號す。國學を賀茂眞淵に學びて歌文
に長じ、漢學を服部仲英、鶴殿士寧等に學びて詩を善くす。もと小舟町の干鰯問屋
なりしが、後家産を傾けて八丁堀に移り、子弟を教授す。晩年松平樂翁公の知遇を
得たり。文化八年二月歿す。享年六十六。
○琴後集十五卷はその歌文を集めたるものなり。

一 琴後集序

むかし、父の世にいますかりし時は、遊びの道に、深う心よせ給へ
りしまゝに、吹きもの弾きもの、なにくれの器ども、家にあまた傳へ
たるを、年頃たびくゝの火にあひて、今は多く失せもて行きて、たゞ
あづま一つなむ、これをのみ昔しのぶるくさは、ひには思ひたる。今
年草の庵を改めつくりて、ちひさき伏屋を、おのがつねに住みなら

○父
村田春道といひ、國學
を眞淵に學び、歌文に
長す、明和六年七月歿
す
○今年
文化七年、六十五歳の
時なり

○絲なきを云々
性不_レ解_レ音、而音_レ素琴
一張、絃_レ數不_レ具、每朋
酒之會、則撫_レ而和_レ之曰、
但識_レ琴中趣、何勞_レ絃上
聲（晋書陶潛傳）

さむ所と定むるにつけて思ひけるは、かのあづまこそ、おのが家の
寶なれ、いかで、これに所得させて、そのかたはらにこそ起きふしす
べけれ、われ琴ひくことはならはねど、絲なきをまさぐりて思をや
りしたためしもあればさて、これをわがかたらひ人にて、さて、こごが
みに硯一つ、火取一つ、こごじりに厨子一よろひをすゑて、年頃の言
の葉ごもをいれたり。

この頃、おのが心しりの人々、まで来ていひけらく、年頃ものし給
へる言の葉ごもは、いかにし給ふぞ。かきあつめ給はむには、われ等
筆たすけまゐらせむといふ。そはうれしき事なり。さるは、拙き言の
葉を、人なみに世に残し侍らむことは、はづかしくわざには侍れど、
あまた年、思を寄せ、心をこめしものを、いたづらになしはて侍らむ
はほいなし。ごもかくも、然るべからむやうにこりなし給はむこそ、
うれしけれ」と答へければ、人々かの厨子よりさうでて、かきあつめ

もて行く。さて、名をばいかに「こいふ。すなはち、琴後とこそいふべけ
れ」とて、その巻のはしつ方にぞ書きつけさせたる。文化七とせかみ
な月ついたちの日。

二 知足庵の記

あはれ、世のならはしこそ、はかなきものはあなれ。たかき賤しき、
品いと異なりといへごも、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、
たゞ足らはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢の嵐をうら
み、月をめづるとしては尾上の雲をいこふためし、誰かはのがるべき。
林に宿る鷓鴣は、わづかなる小枝の蔭をのみたのみ、流に水もこむ
る鼠は、たゞ腹を満たすに過ぎざこそ、いにしへ人もいひつれ。か
かるこごわりをだにわかたば、限あるこの世に、限なき事を思ふべ
きかは。

○林に宿る云々
鷓鴣巢_レ於深林、不_レ過
一枝、偃鼠飲_レ河、不_レ過
滿腹（莊子逍遙遊）

○梅尾の昔
 建久二年、僧榮四宋より歸朝し、茶の實を將來して、之を山城國梅尾の明惠上人に贈る、上人之を喜び、その種を深瀬の園に植う、これ我國の茶の始なりといふ

○古人の云々
 知不足者富

(老子上三十三)

○日をならべて

臣人之與見臣於人也、豈可同日而論哉

(史記蘇秦傳)

こゝに、中村のぬしなむ、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱が軒、松のさぼそに心の月をすましめ、花を摘む夕、閑伽をくむ曉御佛につかふるいとまある時は、氷をくだき雪を煮て、梅尾の昔をしのぶめるわざにしも、心をなむ慰めける。これや、この世に求むべきすぢをも忘れ、また人を羨むべきふしをも思はで、己が心から事足るわざにしもあれば、かの古人のいひけむことわりにこそかなはめ。いでや、うつせみの世の限なき求めあるきはとほ、日をならべてあげつらふべくもあらざりけり、うべなうべな、この住みかをしも、足ることを知ることは名づけしこと。

三文臺の記

よろづの調度、古の蹤あるものは、よそほひありてうるはしかれど、けぢかくもてならし難し。今の世につくり出づるものは、こそそ

ぎて見所なければ、ごりつかふに心やすし。

○桃青法師
 松尾芭蕉、天和の頃薙髮して、桃青と號せり

○神路の山

伊勢内宮より南に連る山なり

○躬弦
 安田躬弦は江戸の歌人にして、真淵の門人なる賀茂宇鸞に學ぶ、文化十三年正月歿す

この文臺は、近き世に、桃青法師が始めてつくり出でたる型なりとなむいふなる。法師は、塵の世を遁れ出でて、假の宿りに心ごまめざりし人なりとかいふめれば、古のよそほしき姿はまねばで、今の世の心やすきに從へるにこそありけらし。又、こは神路の山の杉の古枝を木造りなせるなりとなむ。そは、ゆくりなくなししわざなめれど、これを思ふに、ごりよそひうるはしからむは、大かたに、人の世の手ぶりにて、事そぎてかざりなきは、なか／＼に神代のすなほなる心しらひあれば、この杉もてつくれるを、似げなしともいひ難し。さまれかくまれ、物は事足らば、さてもありぬべきを、あまりにえりごゝのへむとせば、失ふふしも出でくべし。

わが友躬弦のぬしは、古きみやびごご好む人なるが、なほこの古に蹤なきさまなる物をも、あるにまかせて捨てざるは、心ありごや

いはむ。椎の葉も、祕色の环も、物を盛るには心ひとしく、綱代の屏風も、錦のさばりも、身をへだつるに異なるけぢめなければ、すべて、物は、一かたをとりて、かたへをいひつけべきわざにはあらぬにや。

四 わざと法

よろづ何のわざにも、古より法となすしるべありて、それによらざらむは、まことの心を得がたく、その法を得たるは、まめやかなりとて、人もうべなふめり。こは、もごより、ごわりさる事ながら、ふかく事のもごを考ふるに、よろづの事はじめに法をまうけおきて、後にそのわざをなし出づるにはあらず、そのわざあるがうへにこそ、法てふことは出で来れ。かゝれば、わざは本にて、法は末なり。かれ、何のわざにもよく心をふかめて、その道に入りたらむ人は、われより法をばはじめつべし。すべて、くだりたる世の人の心ぐせにて、法

になづみ、あごにかゝづらひて、かへりてあらぬ方にひがみもてゆくたぐひも多かるをや。もろこし人の言葉に、法は法なきがうちにありといへるは、その言葉あぢはひありこそ覺ゆなれ。さはいへど、これは世の常のなほくしききは人のためには、たやすく言ひがたくやあらむ。

五 萬葉集後讀記序

寛政のはじめつかた、信夫道別、安田躬弦などと共に、芳宜園につごひて、萬葉集かうがへよむ事ありき。さるは、この集のまなびする人、今は世に多く出で来て、さまざまにあげつらひいふめるが、いよく思ひ得て、めづらかなりとおぼゆるふしもあれど、又ここざまにひがみもて行きて、あらぬ方にながれたるたぐひもありて、一かたならぬを、千蔭が思ひけるは、いかで、このさまざまにいふなるを

○芳宜園
春海と同門の友加藤千蔭の家を號なり

考へさだめて、初學いんまがくの人の道しるべにもせまほしきをこて、あひ共によしあし定めいひて、かたみに得たる所得ぬ所をあげつらふこととはなりぬ。さて、三とせばかりを経て、よみ終りたる後に、千蔭筆せんいんよりて、略解をばしるしたりき。

そも、略解のおほむねは、たゞことずくなにして、歌の心をのみさとし易からむことを思ひたれば、事長きあげつらひどもは、みな代匠記、萬葉考などにゆづりて、引き出づべきことをも載せず、しるすべきふしをも漏らしたるたぐひ多し。さはいへど、縣居の翁のいはれたる事をむねと立てて、ちかき頃の人の考どもをも廣くこりて、世に動くまじき説をえらびあげたれば、この集一わたり心得むには、かくて足れりともいひつべし。若し、ひろくこの集のおもむきを知らむと思はむ人は、この略解をもことなして、もろくの註しゆ釋をもまじへ考へなば、おのづから思ひ得ることもありなむかし。

○略解りやくげ

此萬葉集略解、すべて三十卷、寛政三年二月十日より筆を起して、同八年八月十七日に稿成れり、さてあまたたひ考へ正して、同十二年正月十日までにみづから書き畢りぬ

(千蔭奥書)

○代匠記

釋契沖の著萬葉代匠記

○萬葉考

賀茂眞淵の著

○縣居の翁

賀茂眞淵

そはその人の心にこそ。

こゝに、我がふせ庵をこひ來る人々、この頃、この集よまむことを求むれば、先づ略解をこりて、その説にしたがひて讀みもて行くに、昔よしこて定めいへることにも、そはいかにぞ覺ゆるふし無きにもあらず。又まれには、わろかんなりこて捨てつる説にも、引き出でつべきたぐひもあり。又あらたに思ひ得る事どもも出でまうで來れば、そのふしなく、いさゝか記しおきて、またこの後、かへさひ讀みなむ時のたすけにもこてなむ。享和の三とせ八月。

六 千年筐跋

縣居の翁の筆の跡に、おほよそ三つのすがたなむありける。その始のほごなるは、まめにうるはしきすぢをむねと立てて、かりそめにも亂れたる所なし。その中らの程なるは、世にかゝはらぬ高き心

○略解

萬葉集略解は寛政八年に卷一より卷五までを出版し、文化九年まで十六年間に、數回に亘りて出版せられたり

○千年筐ちとせのかたむ

○三つのすがた
加藤千蔭の「縣居の大人」にその歌を評せるを参照すべし

ばへありて、やゝうるはしきにはひはうせて、おのづからに強き勢あり。その末の程なるは、物を物にもあらず思ひけちて、筆のまにまにつくろひたるふしなく、心やりのすさみなるなむ多かりける。今この巻を見るに、その始なる、中らなる、末なる、すべてもらさず載せたるは、翁の筆の跡をつくせりこそいふべけれ。いでや、こを見む人、翁の筆の跡をたゞに見るべきのみかは、そのまごころのみやびをも思ひ知るべきにこそあんなれ。唐土人の言に、その筆の跡を見てその人の心しらひを知るこいへるは、まごころにぞありける。

七一 柳千古にこたふる書

さゝぐりを見給ひて、そのあげつらひども、御心にかなひぬこ承るは、いさうれしうなむ。

〇一 柳千古

江戸八丁堀に住し、加藤千庵の門人にして、歌文に巧なり、天保三年に歿す

〇二 さぐり

織錦舎隨筆巻下にある「みのゝ家づとの難」にして、寛政末年に成りしものなり、美濃家妻は本居宣長が其門人大矢重門の爲に、新古今集中の心深き歌六百餘首を抄出批評せし書にして、五巻あり

〇鈴の屋のあるじ
本居宣長

〇藍よりも青し
青出於藍而青於藍、
氷水爲之而寒於水
(荀子勸學篇)

そも、人のしるし置ける書などを、そのきずを求め出でて、しりおとしめ、わがさかしさを人に誇らむとかまふことは、世のえせものの癖にて、そは人の名高きがねたさに、あながちに負けじとするわざなれば、しひごとの多かるならひにて、人をあばきいむむとて、かへりてわが名をくたすたぐひも多かんめり。今おのがものし侍ることは、さるえせ者のまねするやうなるわざに侍れど、これには深く思ふ所なむ侍りける。

縣居の翁が教をうけて、その學びの心をつぎたる人、これかれ侍れど、古言の學びにくはしきことは、鈴の屋のあるじこそ、ひごりすぐれにたれ翁のおもひ残されたるふしをも、考へあきらめたるたぐひ多くて、この人出でて後、この學びの道そなはりぬるは、いみじきいさをにて、まごころに藍よりも青しとせむこと、いへばさらなり。かくて、今は世に名高くて、たふさみしたがふ人も多かるは、いさよ

ろこばしきことなるを、只その歌のあげつらひは、いたくひが心得のみ侍るこそ惜しけれ。さるは、なほしききはの人なりなましかば、さてもありぬべきを、しかすぐれたる人のひが、ここのいはむは、人の惑ふべきわざにて、かつは縣居の歌の教も、この人によりてつひにかくれぬべければ、今そのひが、ここのを改めここのわりて、初學びの人などの、あらぬ方にふみ迷はざらむ道するべにも、ここの思ひこり侍れば、おのがまだしう愚かなるをも忘れて、なすわざになむ侍りける。さはいへど、こは我が心あひたる人にのみこそ見せめ、世の人に廣くはしめし侍らじ。そは人をそしりて、われ勝たむのすさみなりなど、よそ人は思ふべければなり。

又ちかき世に、新古今ぶりを學ぶといふ人多かれど、その人々の歌に、げにも新古今のすがたなりと見ゆるは、絶えてなくて、えもいはぬいやしげなる歌のみ多きは、笑ふべきことなりとのたまふは、

まことにさる事にぞ侍りける。新古今のすがたは、ここのまなるものには侍れど、その世に、そのすがたを始めてよみ出でたるは、めづらかなる一つのすがたなりとも謂ひつべし。さるを、二たびまねびうつさむとするは、よき女のなやみて顔にがめたるを見て、みだり心地ならぬ人の、しひてまねするたぐひにこそ侍りけれ。ましてなほなほしききは、人のまねせむには、人わらへなる歌の出でまうで來ずやはあらむ。かにかくに、まこのよきすがたの歌よみ出でむことは、いさかたきわざにて、誰もよみ得まじう侍れど、せめて心ばかりは高うかまへて、よこざまなる方に流れざらむやうにこそあらまほしう侍るなれ。あなかしこ。

八月花のあはれをことわる詞

花をめぐらしみ、月をあはれむならはしなむ、ながれての世はさ

○花に心を云々
 履中天皇三年十一月、
 船を泛べて遊宴し給
 ふ、櫻花御盃に入る、
 怪みてその櫻樹を求め
 しめて之を得たり、天
 皇その珍しきを喜び
 て、宮を稚櫻宮と名づ
 け給ふ。

○月を言の葉に
 にきた津に船乗せむと
 月待てば潮もかなひぬ
 今は漕ぎ出でな
 (萬葉集一、額田女)

この歌は齊明天皇の御
 代の作にして、天皇は
 筑紫の朝倉宮にて崩御
 あらせられたり

○藤原
 大和國にあり、持統、文
 武兩朝十四年間の皇都
 ○物思ひなき春

年ふれば齡は老いぬし
 かはあれど花をし見れ
 ば物思もなし (古今)

らなる、その源を考ふるに、いさしも上つ代よりぞ起りにける。花に
 心をなぐさめまししは、稚櫻の宮に始まり、月を言の葉にかけ給へ
 るは、朝倉の宮よりなむ聞えたる。しかありて後、藤原、奈良の御世に
 至りては、歌人おほく出で来て、かたみにみやびをかはし、心々に思
 をのぶること、皆月花をもて心の種とぞなしたりける。かくて世の
 うつるに従ひて、このすさみいよゝさかりになりもて行きて、あ
 るは物思ひなき春を花によるこび、加はる老を月になげき、あるは
 さかしきも愚かなるも、たよりなき所に花をたづね、しるべなきや
 みに月をたどり、あるは花のいのちを神にいのり、月のゆくへを佛
 にちぎり、また下が下なるたき木こる山がつ、いぶせき伏屋の賤の
 女までも、月と花とに心をよせざるなむあらざりけらし。さるは、か
 けまくもかしこき大御遊びのきはことなるが中にも、月と花との
 ためには、時にのぞみて、ことさらになうたげの蕙をまうけ給ふこと、

○加はる老
 大かたは月をもめでし
 これぞこの積れば人の
 老となるもの (古今)

○さかしきも云々
 古の代々の帝、春の花
 のあした、秋の月の夜
 毎に、侍ふ人々を召し
 て、事につけつゝ歌を
 奉らしめ給ふ、あるは
 花を戀ふとてたよりな
 き所にまどひ、あるは
 月を思ふとてしるべな
 き間にたどれる心々を
 見給ひて、さかしおろ
 かなりと知ろしめしけ
 む (古今集序)

○花のいのちを
 櫻町中納言が花の齡を
 延べ給へと神に祈りし
 こと、平家物語に見ゆ

○月のゆくへを
 月影は入る山の端もつ
 ちかりきたえぬ光を見
 るよしもがな
 (新勅撰集十)

○花のいのちを
 櫻町中納言が花の齡を
 延べ給へと神に祈りし
 こと、平家物語に見ゆ

掬たがはず、のぞかなる御世のためしにさへなり來にけり、かくさ
 まざまなる世々のあごを見るに、古も今も、高きもみじかきも、月と
 花とをなつかしみ思へること等しくて、いづれを餘れりとし、いづ
 れを足らずとし、一かたに心よせたる人、誰かはあらむ。しかるを、
 今にありて、そのよしあしをことわりいはむは、人わらへにもなり
 ぬべし。しかはあれど、これをことわるに故あり、そのおごりまさり
 は、もごより彼にはあらざめれど、おのがじし、うち見る人の身にた
 ぐへ思はむには、そのよる方いかでかなからむ。そも、花は春に
 ありてにぎは、しきにより、月は秋にありて悲しみをぞ起すなる。
 今このくち翁が心にこりていはば、身すでに老いにたれば、つぼめ
 る花の、さかり待ちいでむたのしみもなく、品いやしければ、花々し
 き世を経て時にかをらむ願もかけず。たゞ鏡にうち向ふ折しも、頭
 の霜を見ては、月の影かど驚き、かたぶく齡を思ひては、入りがたの

八月花のあはれをことわる詞

○くち翁
この文は文化五年六月に、松平定信の仰によりて、人々と共に作りしものにして、春海が六十三歳の時なり

○芳宜園の大人
橋千蔭は、文化五年九月二日歿す、年七十四、春海時に六十三歳

○縣居の庭
賀茂眞淵の門

月ぞ身によそへつべきか、れば花にはおのづからにうごく、月にぞ心のひかれける。さはいへ、こはわが身ひとつのすさみなり。おほよそ人のためには、いかでかまねびもいでむ。

九 祭芳宜園大人墓文

こゝに、文化の五とせ九月八日、平春海、謹みて、芳宜園の大人のおくつきのみまへに、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焼きて、うなねつきて申さく、
あはれ悲しきかも、君は我に十とせいひて一とせのこのかみにおはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君はまさにかりの齡におはして、我はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びに行きかひたる時、あしたに參るこては、君のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべにまかるこては、君の御袖のもこにすがりて、相うるはしみ

まつれるこゝ、親子はらからにも何か異ならむふみ讀むこては、君を師ともたふこみ、歌作るこては、我をおこゝひのつらにぞ教へ給ひける。

○仕の道
千蔭の父枝直は大岡越前守に仕へ、江戸の興力たり、寶曆十三年七十二歳にして職を辭し、千蔭つぐ、時に二十九歳
○つかへをしぞき
天明八年、千蔭五十四歳、疾を以て職を辭す
○同じ巷
江戸八丁堀

中頃にして、君は仕の道にいそなくおはし、我は世のさがにかゝづらひて、おのづからうとき方にも過ぎつるを、君つかへをしぞき給ひて後は、我も同じ巷にうつり住めば、花を尋ぬこては、われ道しるべをなし、月を思ふこては、君が舟にあひ乗り、憂きこども共にうれへ、うれしきふしも共に喜びて、世にありふるわざのまめ事もあだ事も、かたみに隔てなく心をかはせるこゝ、今に二十年、その初をくり返し數ふれば、あひ友たるこゝ、既に五十とせにぞ餘りける。さるを、今おくれ奉りて、いつの世にか相見む、いづれの時にかこゝとはむ。常なきは人の身のならひぞと知るも、これをいかでか歎かざらむ、かゝるを誰かはよく堪へむ。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々にくだり
 行けるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてて古に復り、青雲の高き心
 しらひを求め、しづはたのあやあるみやびごをたふごみいへれ
 ごとくひぜを守り、舟にきだつくるごもがら、かれに泥み、こゝに引か
 れて、なほ怪しみごがむるたぐひは多く、たまあひてよくうけひく
 人なむ稀なりしを、君ひとり心をおこして、あまねく諭し、廣くいざ
 なひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は遙かに靡き
 來て、古ぶりの歌、世に盛になりたり。

その自らよみ出で給へる歌を見るに、古きしらべ、新しきすがた、
 ざりぐに備はらざるはなく、心に思ふことは口に盡さざること
 なく、目にふるゝものは言葉にのせざることなむあらざりける。こ
 れを見て、高きもみじかきも、めでたふごまざる人なし。又事好みの
 人は、その名を君に知られては、身の面おこしと思ひて、世にも誇り、

○くひぜを守り
宋人有耕田者、田中有株、兔走觸株、折頸而死、因釋其耒而守株、冀復得兔
(韓非子五蠹篇)
 ○舟にきだつくる
楚人有涉江者、其艇自舟中墜於水、遽刺其舟、曰、是吾艇之所、從墜、舟止、從其所、刺者、入水求之
(呂氏春秋察今篇)

君のうたを得ては、價なき寶にもかへじごいひてぞ、深く喜びけ
 る。しかるを、今、こがねの聲たちまちやみて、玉のひゞき再び聞えず
 なりぬるは、わがどちの歎のみかは、大かたの世の人のうれへごも
 いひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かゝるを誰かは慕はざ
 らむ。

あはれ悲しきかも。わがかくごあげするを、泉の下にもさやか
 に聞し召し、天がけりても遙かに見そなはせごなむ申す。

石川雅望

寶曆三年、江戸小傳馬町の旅籠屋に生まれ、その家業を繼ぐ、六樹園と號す、家運傾きて後、所々に移れり、狂歌狂文に長じ、宿屋飯盛と號す、又深く心を國學の研究に潜め、擬古文に巧なり、文政十三年正月歿す、享年七十八。

○しみのすみか物語二卷は奇事逸聞五十四條を集めたるものなり。

一 商人茶碗を碎く事

陸奥むつに、あるものゝふ、地火爐ぢくわついでこいふ事すこて、具足ぐそくなご足あらはぬ物もごむこて、市いちに行きけり。

あき人の家あきに、古ふるき茶碗ちawanのありけるを見て、いみじき物なり、買はましご思おもひて、價あを問とひければ、銀五兩ぎんごらうたまはらむご答こたふ。かの武士、いぶかしげなる顔かほして、こはたゞ一兩いちらうのしろにも足らぬものなるを、など五兩ごらうとはいふぞ、おのれ一ぢやう家あるじならじ。さる故ゆゑに、

○地火爐ぢくわついでこいふ事ことなり、茶爐ちawan開ひきのことなり、茶家ちawanにては、十月一日、風爐ふうろを閉しぢて地爐ぢくわを開ひき、客きやくを招まきて茶會ちawanを催もす

こまかなる物の價あ知らざんなり。ごく家主かぬぢを呼びてこいふ。商人しやうじん「やつがれ、主ぬしにて候まう」といふを、聞きも入れで、いかで、おのれ、主ぬしならむ。速すみにまここの主ぬし出でだせご責とがむ。商人しやうじん「なにがしをおきて、外そとにこの家の主ぬし侍まじりらずごいへごいな、おのれはつかひ人ひとなめり、家の主ぬしは、そば目めにも、そのきは見みゆるはやごいへば、商人しやうじんまじりひきあげて、かの茶碗ちawanをこりて、前まへなる石いしに打うちつけ、ほろ／＼とうち碎くだきて、さてののしりけるは、既に茶碗ちawanはかくざまになしつ。なほ主ぬしは思おもはざるかごいひて、腹はら立ちければ、あさましようなりて、いさかひも止とめて歸かへりけるごぞ。

二 受領の子乞食をきる事

受領うりやうの子この、さしすぎ誇こほりかにふるまふありけり。人ひとにあざむかれて、太刀たち一いちふり買かひてけり。この太刀たち、いかなるさねよき鎧よろいをも通

○受領うりやう任にん國こくに赴ゆ任にんして吏務しむを掌つかさどる首くび席せきのものをいふ

一 商人茶碗を碎く事 二 受領の子乞食をきる事

しなむずと人ごこに見せて誇りけり、されど未だみづから試みざるは一定ならずとて、月のほのぐらき夜、從者二人具して、河原をさして行きけり。

かしこに臥せるかたゐのうまいせるを見て、太刀引きぬき、ぬき足して歩みより、諸手に太刀ふり上げ、乞兒が腰をかけて眞二つにきりて、やをら逃げ走りて、一町あまり來ぬ。

されど、そゞろに胸をざり、足ふるはれけるを、よく念じて、從者にいひけるは、胴切といふものは、かひなよくかたまらざる人は、切り得ること難しと、守殿こそその給ひしか、見よ、あの奴、いま胴切にぞしたる。さてもこの焼刃のするごさよ、明日、友だちの人々に語らば、ねたきまで羨みあさみなむずといふ。從者ども、けしうはあらぬ御太刀にてこそ候へ。さるにても、今一たび行き給ひて、彼がさまをも御覽じしらせ給へ」と申す。げによかんなり」とて、再びかしこに至りて、

近づき寄らむとする時、乞兒むく／＼と起きかへり、寝ほれたる聲して、何者ぞ、また來りて打ちた、かむとはするとの、しりけり。

世にわれほめする人は、おほかた、かく未練なるものぞ多かりける。

三 餅を買ひて捨子を拾ふ男の事

或人、大佛殿ををがみてかへさに、あたりなる商人の家に立ちよりて、家づこにもちひ買はばやとて見るに、いささ、やかなりければ、いかで、この餅、よのつねにも似ず、あさましくつくりしぞといへば、商人、この餅ちひさからず。しかの給ふは、一ぢやう大佛殿ををがみ給へるなるべし。かの大なる御佛を拜し給へる目うつしには、よろづの物、皆さ、やかにこそ見ゆれといへば、げにさる事あるべし。とて、餅を懷に入れて、一二町あゆみ行きける。道の傍に、かぶるなる

みどりごの、人の捨てたるにや、すゞろにねぶり居たるを見て、あな
いごほし、母に添寝の夢見るにこそ、あはれがりて、かき抱きて、ま
た四五町ばかりあゆみけるが、あまりに重くてこうじにたれば、し
ばし憩はむとて、かきおろして、顔をまもり見れば、老いたるかたゐ
の尼にてありけるこそぞ。

四 學生源廣が家の童の事

學生源廣が家にわらはあり。常に主につきて、ふみ讀むことを習
ひけり。

或時、家のおこなに向ひていひけるは、唐土人は、すべてあらぬい
つはりごをぞいふなる。學問の道は、なか／＼世に用なしといふ
おこな、何事のありて、さはいふぞと問へば、わらは、今ほど、李太白集
を讀みて侍るに、白髮三千丈といへる句あり。これ限なきそらご

○學生

大學寮に於て經業を受
くるもの

○李太白集

李白の詩文集にして、
すべて三十六卷あり、
太白は字なり

○白髮三千丈

白髮三千丈、緣愁如、箇
長、不知明鏡裏、何處
得秋霜

(照鏡見白髮詩)

○顏淵鬢四間

德行、顏淵、閔子騫、
冉伯牛、仲弓、言語、
宰我、子貢、政治、冉
有、季路、文學、子游、
子夏 (論語先進篇)

○袴垂

名を保輔といひ、袴垂
はその部名なり、花山
一條頃に出でたる大盜
なり

ならずやといふおこな、あらず、わぬしが物學びするここの足らざ
れば、さる疑も出で來るなり。いま大學に入りて、博士の御前にて學
問してみよ。さる疑ははるけなむ。そも、かしこは、我が日の本に
はまさりて、國も四百餘州ありさか。さる廣き所なれば、さばかり髮
ながき人もあらざらむやは、わぬし論語をば讀みたるべし。かのふ
みに、顏淵鬢四間とこそ見えたれといへば、わらは、げに、いひ
て、うなづきけるさか。

五 檢非違使の下司となりたる人の事

袴垂といふ盜人、所々おし入り、人を殺し、物を盜むなりとて、都の
辻々、一町ごとに小屋つくりて、夜晝三人づつまもりてあれど、檢非
違使の廳よりふれ知らず。なほ番のものの怠りもぞするとて、下司
夜晝見めぐらひて、番人の數をあらたむべきの定になりけり。

これによりて、下司に人あまたそへける中に、いみじく貧しき人召されて、この役にぞくははりける。大きに喜びて、昨日まではしたなめ譏りける者どもに、勢つきたる程をも見せましなど、心にかまへ居たり。さて見めぐりありくには、従者三人ばかり具すべき例なるを、この人、従者のなかりければ、俄に人をやこひて、ひき連れて出でけり。

我が家の近きあたりに、番の小屋ありけるを、近寄りて、番人やあると呼べど、いらへする者なし。いらちて、大聲に呼べば、向ひなる竹垣の門の中より、老いかゞまりたる翁出で来て、つゐるてぬかづく。「おのれ番人か」といへば、「さに侍り」といらふ。いかで、小屋をあけて、番せではあるぞ。おほやけの仰せごを、きやうくゝに思ひてある。かろからぬ罪なり。別當の廳に申して、うきめ見せてむ。おのれ、誰ぞ名のりせよ」といへば、翁かしこまりて、「やつがれ、まことは番人にては

○別當の廳
檢非違使廳

候はず向ひなる家の門守にて侍れど、只今のほど、しばし小屋のあたり心つけて見てあれと頼まれて侍り。さるを、名を問はせ給ひて、怠りを責め給ひなむには、まことの番人の出で來むを待ち給ひて、問はせ給ひね」と申す。さらば、まことの番人は、いづくにかある。と問へば、「一人は、風病ふうびょうおもきに堪へで、親の家にかへりて侍り」といふ。されど、三人と定まりたる番人なれば、いま兩人は、いかでこゝにはあらざる、いづくにか行きたる」といへど、翁たゞおぢかしこまりたるのみにて、いらへせず、いかにや、おのれ知らざるやうやある。いへいへ」と責むれば、翁やうくゝに頭をもたげて、申すにつけては、はゞかり候へども、せめて問はせ給へば、告げ奉るなり。御供に具し給ひて、御太刀持ちたる者、大傘もちたる男とこそ、こゝの番人には候へ」と申せば、すこしをかしくなりけれど、念じて、いかにまれ、番すべき者の小屋にあらざるこそ、ゆゑ、しきくせ事なれ。再びかゝる事あら

ば、廳に申さむずるぞ」といへば、太刀持、傘持と二人、ひたひ地にうちつけて、「この後さる事仕らじ。今日ばかり、かくて侍りなむ」とぞいひける。うしろでをかしさは世の常なりきと見たる人の語り傳へけるぞか。

松平定信

田安宗武の子にして、徳川吉宗の孫なり。寶曆八年生まる。十七歳、奥州白河の城主松平定邦の嗣となり。二十六歳封をつぎ、三十歳老中となり、文教を振興し、治績を擧ぐ。三十六歳、老中の職を退き、五十五歳、退隱して樂翁と號す。和漢の學に通じ、著書多し。文政十二年五月歿す。享年七十二。

○花月草紙六卷はその隨筆集なり。

一花のこと

無しと聞けば、有りといはまほしく、悪しといふをば、善しとことかへていはむこそ、いさねぢけたることなれ。櫻てふ花は我が國のものなるを、から國にもありとて、さまざまためしなご引きつくれど、櫻かいたる唐土ちゆうどの繪もなく、かなへりと思ふからうたも無ければ、無しとこそいふべけれ。

いでや、櫻といはでしも、花ごだにいへば、こゝ木にはまぎれぬものを、ほのくゝとあけ行く山ぎは雲か雪かさばかり咲きみちたる霞こめたる夕まぐれ、花のけはひもおぼろに見えて、こゝにのみ暮れのこすけしきなどいふは浅かりけり。まいて、うてなのびやかなれば、近劣りすなどいふは、かのこゝかへて、才^まおふ心にいふことなりかし。

風に散りかふも、雨にぬるゝも、遠山に見るも、軒端にむかふも、曙も、夕暮も、露のひるまも、目かるゝ時しなきを、こゝに我が國ぶりの姿にて、枝もすなほに、花の形もゆたけく、匂さへこちたからぬも、あやしきまでにこそおぼゆれ。さるを、いづこにも有りといふはさらなり、曙、夕暮など、おもしろからむやうに言葉そふるは、いまだ深くそめし心にはあらざりけり。すべて言葉もていひ盡くさむと思ふは、いと浅き心かな。

二月のこと

月のさしのぼる頃、曙の空おぼえて、横雲のたなびきたるに、やゝ匂ひそめたれど、遠山の梢にいさようて、姿も見えず、からうじてさしのぼりけり。梢のうさも晴れにけりと思へば、いつしか雲の一つ出で來たるが、ちかよる程、あやにくに、月のかたより雲のうちへかき入るやうに見ゆ。こはいかにせむと、しばし打ちまもるに、雲のはしつかた赤う見ゆるにぞ、出ではなれたらば、はやかゝらむくまはあらしと思ふに、いつのまにか、又白雲の月まぢ顔にたなびきて見ゆれば、胸打ちつぶれて、打ち見るに、初の雲より出でたる光、いとあたらしう見えて、こゝにさやけし。かの待ち居たる雲にむかへば、又はせ入るもいとつらし。月のいりて見れば、雲もさすがにこちたからず。こゝかしこに、それと面影見ゆるにぞ、ひたすらに恨みはてで

見居たるうちに、衣手もしめり行きて、露も虫の音もさかりなりけり。つくづく、とむかひ居たれば、心のはてなきやうにおぼえしが。

三 船を知ることに

たゞうごは、いさり船といへば、同じやうに作るものと思ふべけれど、こは、さ造りても、おのづからよくこゝのひて出で来るもあり、こゝはよく、かしこは悪しきもあり、打ち見てはいかにもよきが、乗り得てみれば、たがふもありて、一つも同じからぬものぞかし。波風しのぐと思へば、行くことにぶきもあり、行くことこきものは、よわきもあり。いづれ、いさゝかもふしなきはなきものなり。乗り試みて、それを明かに知り得てこそ、遠くへもはせつべけれ。

昔、ある人が、人を見て、いかにも善き人なり、いさゝかも悪しき所なしと思はば、まづ思ひかへして、聖は知らず、かしこき人とても、いづこもくまなく善き人はなきものなるを、さ見ゆるは、わが心のくらみしなり。まづその人の悪しき所々よく知りての後に、あげ用ゐ給へ」といひきこ聞きしが、翁が船に乗るも、今いふごととして、悪しき所々を知れば、悪しき方へは波風うけず、よわきには、波風ある日、沖を乗らでありしかば、つひに危きをもまぬかれき。

四 晴雨のこと

ひでり續く頃は、こちかぜ吹きて雲の出でたるにぞ、さらば今日こそは降り出づらめと見るに、その風もいつしかやみて、雲もむらむらと絶え間がちになれば、はや日の影のきらめき出でぬ。

又雨の降りつゞく頃は、松吹く風の音いといさぎよくて、はや晴れなむと見れば、雲間もはやむら／＼と青く、入日の方は、こちたきまで紅ふかく見ゆるにぞ、この夜の月よ、明らかこそと思ふに、月

○この夜の云々
わたつみの豊旗雲に入
日さしこよひの月夜あ
きらけくこそ

(萬葉集卷一)

いづる頃は、雲出でて、又玉水の音するものぞかし。

代々の亂れ治まるきはも、わが心のうへも、この如きものぞかや。

五 やまと歌

やまと歌は、人の心より、あめつち、鬼神をも感ぜしむなごいふは、和歌の道にかぎることにはあらず。たゞ一つの誠もてこそ、大ぞらをもうごかしつべけれ。

漢の高祖の太子うごかすべきわたくしの御心を、さまざま、こころわり盡くして人々諫むれども、うけがひ給はず。さるに、周昌といふ人が、口にはいひ得ねども、よからぬことを知れば、その詔をばうけじ。こいひしひごことにて、さばかりの御心まごひもはれ給ひきこか。

されば、よし言葉の花を咲かせたりとも、誠の貫くにあらざれば、

○やまと歌は云々
やまと歌は人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける（中略）力をも入れずして天地を動かし、日に見えぬ鬼神をもちむと思はせ、たけきもの、ふの心をも怒むるは歌なり（古今集序）

○漢の高祖の云々
周昌爲人強力、敢直言、高帝尤憚。周昌及帝欲廢太子而立戚姬子如意爲太子、大臣固爭之、莫能得、上以留侯策即止、而周昌廷爭之、強上問其說、昌爲人吃、又盛怒、曰、臣口不能言、然臣期期知其不可、陛下雖欲廢太子、臣期期不奉詔、上欣然而笑。

（史記張丞相傳）

えうなきことなり、誠も貫きて、言葉の色もそなはりなば、いごま人の心をも動かし、やはらげつべければ、ひごやうに、實だにあらば、花はなくともありなむこはいはじ。

六 浅草の市

年の暮に、浅草寺のあたりに、市といふことありて、ここに人多く出づるなり。

ある人、薩摩國より、鮑の貝おほく買ひ求めてけり。その貝の穴をふたぎ、木もて蓋を作りて、その市にて賣らむこはかりけるが、折ふしきはることあれば、人にたのみて、晝つ方には來たるべし。それまでに賣りてたべこいふにぞ、もて出でて賣るに、かへりみる人もなし。さればよ、かうやうのもの、この市にて賣りしためしなきを、えうなき事に時つひやすものかなと思ひつゝ、いかに賣れども買ふも

○浅草の市

浅草觀音の年の市は、十二月十七日十八日の兩日にして、江戸第一の大市なりき、諸人嘉例として正月の物を求めんとして、晝夜群衆雜沓せり

のなければ、ゆききの人の袖ひかへて、「これめさせ給へ」などいふに、引き放ちて行くめり。

晝すぎる頃、かの人來りて、いかにご問へば、かくいふ。何ぞかいひて賣りし「こいへば、べちに何ぞかいはむ、貝焼の貝めさせ給へ」と賣りき「ご答ふ。彼ほゝゑみて、わが賣るを見給へや」とて、いと聲高に、「はやなべ〜」こいへば、過ぎ行くものは立ちかへりて買ひ求め、そこら行く人も、聲をもこめて買ひぬ、見るがうちに、多くの貝を皆賣りてけり。

この市は、人多く出づれば、ごごにかまびすしくて、しづかに心こむるものも無ければ、手桶賣るものは、「さはら〜」こいふ。さはらの木もてつくりし手桶よごは、いふいごまもなく、聞くひまも無しごかや、物の勢いふもの、またごごわりの外なるものなりけり。

七 雨のこと

「月の夜半こそ、思ふくまもなく、心の底もすみわたりぬるものなれ。されど、やみの夜の空晴れて、星の光さやかなるに、風たかく吹きかふは、又まさりぬるやうにおぼゆ」といへば、雨ぞ、いとまさりぬるを「こいふ、いかに」と問へば、「いでや早天の雨はさらなり、草木の花咲きみのるも、皆この恵にこそあんなれ。又その感情のふかさをいはば、今日は元日なりけり」といふに、雨そほ降りてかすみわたりたるは、げに春やごぞ思ふめる。師走のみそか、のごやかに降りたるも、春待ち顔にていとをかし。すべて、春は雨こそ、のごかなれ。軒端よりかすみわたりて、いとこまやかに降れるが、衣かきうるほせごも降るとは見えぬ。軒の玉水も間遠に音して、住み捨てし蜘蛛のいに玉ぬくけしき、庭のおもの枯生の底に、緑のやゝそひ行くも、柳の絲の動きも

やらで露そふも、こもにいこのごかなれ。燈火かゝげても、何ごなく光しめりたるに、鐘の音のほのかにひゞきくるも、心すみわたりぬるものぞかし。その外、梅が香のしめり、夜ぶかく匂ひわたるも、花にうしごかこちぬるも、あはれはありけり。春も老い行く頃、蛙の時得顔にすだくもをかし。

時鳥の初音いかにご思ふ頃、村雨のはら／＼と降り出でたるも、五月雨のいく日も降りくらしして、書の卷々くりかへしつゝ居たれば、何ごなく世の中の事にも遠ざかりぬる心ちぞする。また暑さに堪へかぬる頃、雲のみなぎり出づる勢ありて、風ひごしきり吹き落ちたるに、柳、蓮葉、なんごの葉うら白く見せたるも涼し。やがておほきやかなる雨の間遠におちたるが、後にはしきりに降りきて、物音も聞えず、土のほひきたるもいご心地よし。軒端は玉のすだれかけたらむやうに、玉水の絶え間なくおちたるに、庭はひごつみづう

みごなりて、あるは瀧おとし、又は水走らせたるに、人々しばし物いはで、打ちまもり居たるもをかし。やゝ雲うすくなれば、池の面には、かぞふばかり雨見えて、小鳥など庭へをどり出でて、餌ひろふさまなり。はじめ雲のたち出でし方は、はや空の一しほみごりに見えて、虹なんご見ゆるに、木々のみどりの、庭、影見ゆるもいご涼し。老いたる女など、かみの音に驚きてはひ出でたるが、今日のは若かりし時のごと、よく晴れにけり、いま時のは、かく晴るゝごご稀なり。なんごはや繰言いふもあり。かれはかくあわてきなごいひて、かたみに笑ひごよみつゝ、今日は蚊も少かるべし、かみの音もいごかすかなり、この頃の暑さも忘れぬごて、端ちかう出づれば、夕月の光さしわたりて、草木の露も玉なすに、肥えふくれたる蛙の、物待ち顔に空うちならみて、ふつゝかなる音になくもをかし。

秋くる頃の雨は、きのふにかはりて、何ごなうさびし。萩のうはか

ぜ、外山の鹿の音なんど、月よりも身にしむ心地ぞする。常に聞きなれし、笈の水の音までも、あはれ深くこそ、月の前の村雨もまたをかしまいて、や、夜寒の頃、鳴きからしたる虫の音の、雨のをやみに、かすかなる聲して、枕近く鳴きよるもあはれなり。この雨に木々もそめなむと思へば、草たぐなどもおひ出でなむ、栗たぐもはや落つべしなど、わらはべの物淋しげに、燈火に向ひつゝ、いひ出づるも、げにさまんゝなり。夜ぶかき鐘の音の打ちしめるものから、さすがに秋は聲さえて聞ゆるにぞ、待つ夜、わかれの思までも思ひ出で、鐘つく人の心もあはれと思ふばかり、感情はいと深かりけり。紅葉の染めそふも、白菊のうつり行きて、ひと盛り見するも、尾花の露重げにうちしをれたるに、龍膽たぐの恨ふかく咲きたるあたりもつきくし、朝顔たぐの、みな枯れたる中に、さゝやかに赤う咲き出でたるが、晝すぐるまでもしばみおくれたる、又あはれなり。野分の風は、おごるゝしきものか

ら、雨は夕立に劣らざれど、さすがにあはれを添ふるは、秋のならひなるべし。

時雨のざと音して、夕日に白く降りくるも、又音かへて枕たぐもをかし。月よりもやみの夜よりも、あはれ深きものには侍らずや、こいへば、かうやうにいひならべては、げにもこいふべからむが、一とせもふる心地して、よみ見れば、この雨はをこつひより降り出でしを、思ふ心はかはらじと、心のうちに思ひて聞き居しも、又をかしかりけり。

八 文のこと

學問は人の道まねぶことなり、からうた作り文たぐつくるはせむなしと、よく人のいふことなれど、みやびは花のかをりの如く、物のうるほひの如し、まいてかの國の文字をおぼえて書たぐよむことも、文字の

つかひざまにて、深さ浅さのたがひめあるものにて、かの國の人の
ごさは知り得がたかんめれど、さすがに、からうた作り文つくれば、
おのづから言葉の外なる心をも得るものとかや聞きぬ。さればな
すには若かじかし、なごてこれを禁ずべき。

九くすしの術

ある醫師ありけり。病むものあれば、かみしもえらまず、いせせち
に心をつくしけり。いそいたう賤しきもの病めるありけり。薬箱い
だいて薬調ずるに、その母なりける老婆の、つくづく見てゐしが、
ゐざり出でて、はゞかりなる事ながら、ねぎ思ふことこそ侍れとて、
いそいひかねたるを、何の事にてもあれ、思ふことは打ちあらはし
ていひね、いへば、つゝましげに聲ふるはして、下にくみ置き給ふ
箱の御薬もたまはれかし、いひけるにぞ、思はずほゝゑみて、さら

ば與へむとて、下にありしがうちの、さはりなき薬ふたつみつとり
出でて調ぜしが、必ずその薬はしるしあるべしと語りぬ。

かくおろかなる者に、この病には何といふ方劑調ずることなり、
それは何々の薬を用ゐる、この箱の上の方に、おのづから入れ置き
たれば、ごり出して調ぜしなり、下にくみたる箱のこて、たふときい
やしきのへだてはなしと、まめだちていふとも、いかで聞き分くべ
き。さはりなくば、その心にまかするにてこそ、をかしけれ。

一〇引きのばすくせ

物を引きのばいて、時うしなふ者ありけり。人の早苗植うる頃、種
ほごこしてけり。葉月の頃、早稲の穂の出でたるに、嵐吹きてければ、
花散りぬと嘆くを、あまりに物急ぎし給へばこそあれ。我が稲は、こ
の頃植ゑにしかば、嵐のわざはひにもあひ侍らずと、人にたかぶり

けり、人の刈りをさむる頃、少しばかり穂の見えたるが、はや霜のおきてければ、皆枯れぬ。今年はいそ早う霜のおきしなり。さて年をのみ罪して、いまださくらざりきとなり。

一一人を責むること

人を責むるは、あらはなるを責むべし。か聞きし、先づおもて改めたらば、よし。こそいはめ。かれは虎の皮著ぬる羊なり。とはいはじ。羊にもせよ、虎の皮著たらば、虎にしてこそ養はめ。さらば千里をば走らずとも、羊の力の及ぶだけは走りもしなむ。外を責めて内を責めざれ。昔より聞きしを。

一一老鯉

年経る鯉のありけり。いかにして、さまざまの事にもかゝり給は

○面改めたらば
君子豹變、小人革面
(易、革卦)
○虎の皮云々
或曰、有人焉、自姓孔而字仲尼、入其門、升其堂、伏其几、聽其裳、則可謂仲尼乎、曰、其文是也、其實非也、敢問、實、曰、羊質而虎皮、見草而說、見豺而戰、忘其皮之虎也(揚子法言)

で、かくてましますぞ。ご問へば、さらば語りものせむ。かぐはしき餌のあれば、ごめきても食はまほしきを、これぞ大事のこご心にしめて見れば、あやしきこごあるものなり。さ思ひつけば、鱒ふりて、遠くのがれて、いさゝかも顧みず。よその魚も、あやしきこごよごは思へご、遠く去るこごをせず。わらはべなんごは、かの釣針てふものにかゝりて、いかほごもごらるゝを見ながらも、ごにかく、そのかぐはしさに心つながれて、あたり離れずありきて、心のうちには、愚なる魚ごもこそ、皆かの餌にごらるれ、いかで我は彼にもものせられむご思へご、ひめもす、このあたりになごよひぬれば、かのあやしき外に餌のなきに、せむ方なくて、立ちよりて、少し食ひてむなごするうちに、つひにはかゝるもあるぞかし。

また綱ごいふものあり。ごご音しぬれば、四方みな綱の目なり。こはいかにせむご思ふに、あるはあわてさわぐもあり、又は何ばかり

の事かあらむなご、かしこき人をも侮りて、跳り上りて越えむごし、又は破らむごするを、人はもごより人なれば、さまざまに扱ひて、つひに捕るぞかし。我は、かのざご音するを聞けば、心しづめて、水底につきて離れず、あびきは上の方を行きぬ。故に捕らるゝごごなし。かはうそ、あじかなんごいふものもあれど、深くひそまり隠るれば、そのうれへもまぬかれぬ。

又、にはかに雨降り出でて、思ひよらぬあたり、又は常いさゝか水の落つる岩がねなごより、瀧の白絲くりためて、落ちそふ勢のはげしさに、心も浮き立ちて、かの龍門の瀧ならぬごごは知りながらも、あまりに心地のよさにほだされて、その瀧をのぼるにぞ、あるは岩かごにあたりて傷つくもあり、からうじてのぼりぬるも、雨やみぬれば、いと浅き瀬なり、歸らむ道も知らねば、深きごころへたどり行くを、行く人なごの見つけて捕るぞかし。かうやうのにはかなる

○瀧の白絲云々

清瀧の瀧々の白絲くりためて山分け衣おりてきましを

(古今集十七)

○龍門

河津一名龍門、水險不通、魚鼈之屬莫能上、上則爲龍

(後漢書李膺傳注)

一登龍門、聲價百倍

(李白)

勢にもものらずして、かく百年をもいく度か經にけむご語りき。

一三 寢覺の床

寢覺の里にゆきてみれば、案内のもの出できて、この岩は獅子ごいふ、虎ごいふなご教ふるもうるさくて、いかで、ごは獅子なるべき。これはた、虎の形ごは見えぬを、なご、ひとつゝいひ消ちて行きぬ。そのかへさの道に、名もなき岩のありしを、よくも、ましらの腰掛けし姿に似たるかなごいへば、げに、ご人もいひけり。あごより來たる人をまねきて、ましらに似たる石あり。これ見給へご、ほこらしげにいへば、似たる所なしごいひけり。

あけの年、かの寢覺の里へ行きてみしが、案内のものいひしごごは、はや忘れてければ、ごは虎の姿なり、ごは獅子の勢なりご見なしぬ。はじめは、虎よ獅子よご聞きてみれば、似たるやうには思はざ

○寢覺の里
信州木曾川の一部、寢覺の床なり

りしが。

石原正明

寶曆十年、尾張國に生まれ、蓬堂と號す。始め本居宣長に學び、後塙保己一の門に入りて塾頭となる。有職の學に精しく、和歌を善くす。文政四年正月歿す。享年六十二。○年々隨筆六卷はその隨筆集なり。

一 雪月花

花はさくら。櫻おほかる山に、松など立ちまじりて、色ざり分けたらむやうなるが、一しほ見どころあり。友だち四五人ばかり、一とせ、嵐山の花見に行きしことあり。今日ぞ盛ならむとおぼゆる程にて、かつ散るもあるに、渡月橋のこなたを、川添ひに水上の方へ行く。風のささ吹きあるゝに、雪かさばかり亂るゝ花の、となせの瀧の岩波に、やがてまがひ行くなごいひしらずをかし。中野三郎といへる人、川中の大きやかなる巖に腰うちかけて、笛高やかに吹きならした

一 雪月花

壹

○嵐山

京都市の西郊嵯峨と、大井川を隔てて相對す

○渡月橋

大井川に架したる橋にして、嵯峨より嵐山に通ず

○となせの瀧

嵐山の西北大井川に、龜尾瀧、月無瀧ありしを、角倉了意の開鑿せしにより、今はなし

○春おもしろく
笛の音の春おもしろく
聞ゆるは花ちりたりと
ふけばなりけり

(後拾遺集二十)

○南の樓

亮在武昌、諸佐吏嚴浩
之徒、乘秋夜、往共登
南樓、俄而不覺、亮至、
諸人將起避之、亮徐
曰、諸君少住、老子於此
處興復不淺、便據胡
秋、與浩等談詠竟坐、
其坦率行已多此類也

(晉書庾亮傳)

るが、水音にひゞきあひてをかしきに、かたへにありつる法師、春おもしろく聞ゆるは、と打ち誦したりしこそ、折からをかしう覚えしか、この法師、いづくの人なりけむ、心にくきけしきなりつるを、物をだにいはで、やがて行き別れつるは、口惜しきことなり。

月は水のほとり、殊によるし。いと大きな川のごやかに流るゝあなたの岸にまごゐして、打ち笑ひなごしたる、から人の登りけむ南の樓おもひ出でられて、誰ならむとゆかしきに、千里に明かなりと詠ずるにやあらむ、ほのく、聞ゆる、いとをかし。

雪はいづくもく、をかし。たゞ海のみすさまじげなり。それも、みな江の蘆すこしばかり折れ残りたるひまに、泊舟二つ三つ、蓬いと白う見ゆるはをかし。市の中は、何事も目とまる事なけれど、たゞ雪の朝こそ、めづらしうをかしけれ。すべて、いづくも、雪はけしきことに、所かはりたる心地して、珍しうをかし。日のさしのぼるほど、皆

起き出でて、往來さがしきまで道あしうなりぬべし、いとあぢきなし、疾くはき集めよ、取り捨てよなごいひ騒ぐこそかなしけれ。

一一 まる

古の人は、なに鷹ごいふ名多し。自稱してまるごいふも、まるはもとより自稱なるにつきて、人の名にも多くつくか。人の名に多かる故、自稱ごもなれるか。本末は知らねど、一つ根ざしの詞にはあるべし。

宇治拾遺物語に、猿を猿まるごいひ、狭衣物語に、蝨をいなごまるごいへり。枕草子に、犬に翁まるあり。駿牛繪詞に、牛に獏丸あり。太刀刀、琴、笛、何物によらず、何丸ごいふ名、多くつけたるものなりしに、今はさることをさく、聞えず。たゞ舟のみになほその名残あり。

或人の考に、みづからの上をまるごいふは、藝能ある人をかごあ

○宇治拾遺物語

百九十六の説話を集めたる書にして、十五巻あり、順徳天皇の頃に成れり、作者詳ならず

○狭衣物語

平安朝中期以後に出でたる小説にして四巻あり、作者詳ならず

○枕草子

清少納言の隨筆にして、翁まるの話はその第六段に出でたり

○駿牛繪詞

詳書類從四百九十三にあり、名譽の駿牛を列擧したる繪詞なり

りといふ反にて、唐國にて不肖なごいふも同じ心ばへなりといへり。げに、これはよく相對ひてきこゆる詞なれば、打聞きはよろしき説のやうなれど、さやうにこざかしくみづからおとしなごするこゝは、上れる代には無きこゝぞかし。若しこの説の如くならば、猿まろは藝なし猿といふことならむかし。蠢まろも藝なし蠢といふにやあらむ。かの物語には、拍子うつこありつるものを、心うき名にあらずや。

すべて、言葉の本義は、いかなる事とも知りがたし。それ知らずとも、まろは自稱なごやうに、常用をだに知らば、何の事缺くこともなし。然るを、あながちに解かむとすれば、必ず横ざまにゆがみ行くものなり。しか知りがたき事を知らむとせむより、いとよう知らるべきことこの知らであるが多かるを、まづそれより學びとるべきわざならずや、世の學者たち。

○かの物語には
 狹衣物語三の上には「い
 たち笛吹く、猿かなづ、
 いなごまろは拍子打
 つ、きりくすは」と
 いふ俗語らしきもの
 を、琵琶にあはせて讀
 ひたること出づ

三 時鳥

時鳥をめぐる歌古にはをさく、無し。おのづからありもすれど、後々のやうに、打ちまかせてめでたき物にしたるにはあらず。いつの頃より斯くもてなして、われ人めぐる物にはしたりけむ。それも、京にては、稀に聞くゆゑのことなり。江戸にては、はじめ一日こそ、これぞ初音よと思ふに、めぐらしき心地もすれ、月日へて、里なる、まに、たゞ耳のもごにさしつけたらむやうにてうるさし。四谷、市谷などにては、文月なかば、なほ聲たえず、いとすさまじ。

卯月に閏のありける年、赤城の杜の木陰すゞしかるべしとて、二人三人物しつ。そこはかこなく茂りあひたる遠近のけしき、いとをかしうて、久しく立てるに、時鳥の、わが蔭しめたる槻の木にしも、二つ三つとまり居て、いづれまされりと音をつくす。うるさしといへ

○四谷市谷
 四谷は宮城の西、市谷
 は四谷の北にあり

○赤城の杜
 牛込區赤城元町の赤城
 神社の境内なり

ぎ、行くての聲はなほをかしきをこゝ去らず鳴くは、ふくつけさ、にくさ、いはむ方なし。おのれ、

うるさしよ聞くもうつきの今年またあまりあるまで鳴く時鳥

こよみつ。事ざましなる歌なり。

かくいひながら、年ごこの卯月のはじめ、今は鳴くべきにやこ、心もこなうて待たるゝぞ、心よわきや。日ぐらしにて昨日、小石川にてをこゝひなど、人づての聞ゆれば、あやしうすゞるなる心地す。

四 はしか

今年、はしかといふえやみ起りて、高きいやしき、みな病みのゝしる。卯月ばかりよりの事にて、早月、水無月、家々おちず病みつゞけたり。

○日ぐらし
東京府北豊島郡日暮里村のことにして、東京市の北に連る

○今年
享和三年にして、正明四十四歳の年なり

○安永五年
正明十七歳の年なり

この病は、生ける限にたゞ一たびわづらふ事にて、二十ごせあまり隔てて起る事なり。さきの度には、おのれもわづらひつるを、まだをさなき程にて、はかくしう覚えなど、世に知らず苦しかりしごばかりは、なほ忘れず。それは安永五年の事なりといへば、二十八年さきの事なり。

さやうに、まれくしうのみあるものなれば、醫師なども物なれずて、たゞしうのみあめり。さきの度にもはら療治せしは、この頃老いしれて、物の用に立つは少く、この頃むねと療治するは、さきの度はまだ書生にて、その術をよくも覚えず。されば薬もよくもあたらぬにやあらむ、人の多く死ぬめるは、せむ方なく悲しき事なり。文月の程は、たゞ死にに死にて、野邊の煙も、天雲とたなびくばかりなり。き世の常なきは、今にはじめぬ事ながら、これはたゞ若くさかりなる人の限りわづらふ病なれば、いと悲しき事のみ多くて、世もか

○先生の幼ない君
正明初本居宣長に學
び、後堀保己一に師事
す、保己一の長男寅之
助は寛政九年八歳にて
死し、享和二年次男道
之助生る

○箕裘
貞治之子、必學爲箕、
真弓之子、必學爲箕、
(禮記、學記)

くて盡きぬるにやと覺ゆかし。

おのれが親しきあたりにも、悲しき事ども多かり。先生のをさな
い君、まだ二つにて、美しうつぶく、と肥えて、この頃何となき物語
し、高やかに打ち笑ひなどして、らうたきこと限なし。をのこ子はこ
れひとつにてさへあれば、夜光る玉とこそもてかしづきしか。行末
は、おのれ力を盡して、箕裘と聞ゆるわざも、すべて何事も、點つか
まじく後見立てむと思ひつるに、雜熱などいへば、心さわぎして、い
かでこたみ恙なくなご、祈らぬ神も佛もなしゆ、しき御大事ぞな
ご、醫師どもの打ちかたぶけば、いとおそろしけれご、さりとも異な
る事あらしご、神佛をたけきものに思ひつるに、三日ばかりありて、
たゞ消えに消え入り給へば、心地ほれく、として、思ひわく方こそ
なかりしか。この時は、あまりの悲しさに、歌なども出で來ず。

五 初春

朝ゆふべさうつり行く一とせの程に、折にふれ時にしたがひて、
あはれにもをかしうも覺ゆる中に、初春のけしきこそ、いさましう、
心ゆくものはあれ。何事か昨日にかはれると打ち眺めやる初空、い
つの間にか霞みわたり、明けゆく雞こゝろが音、まづいさましう、門毎に松
切り立て、竹さし添へて、春風のおとづれ待ちつけたる、いさうれし。

梅の花いさめでたし。香はもとよりいはむ方なし、色も羅浮の少
女の月のもさに立てりけむ昔おぼえて、艶にやさし。大かた、世の人
は、櫻をのみめでたき物にする、それまことにめでたけれど、桃、海棠
など、及ばずとも傍ある心地するに、これは異木の冬籠りたる中に、
匂いさよなくて、氷のひまより打ち出づる波ならで、立ちならぶ
花もなきは、心さかりけりと思はる、がをかしきなり。この蔭にぞ、

○羅浮の少女
隣の道師雄といふも
の、羅浮の梅花村にて、
月夜一少女に會ひ、共
に飲み共に語る、蓋し
梅の精なりしといふ
○氷のひまより
谷風にとくる氷のひま
ごとにうち出づる波や
春のはつ花(古今集一)

○花のひとへに
春はたゞ花のひとへに
咲くばかり物のあはれ
は秋ぞまされる

(拾遺集九)

黄鸝はかくるなる。この鳥はた、打ち解けて聲惜しまぬ後の日數よりも、なほ心もこなげなる初音こそ、けにくくてゆかしけれ。

柳が枝も、やうやうに淺緑なる絲打ち靡きて、眉ごもりたる程、いそをかき。花のひとへに咲くばかり、春をいひけちたる昔の人も、ひたおもむきなるかたくな心もて、物のあはれ知り顔にこそ、にくきまでなむ。

あはれこそをかきとも思はるゝは、時こなきものながら、なほ初春こそ。

藤井高尙

明和二年生まる。備中國吉備津宮の宮司にして、松廼屋と號す。國學を本居宜長に、和歌を梅井一室に學び、京都に上りて攻學に従事す。天保十二年八月歿す。享年七十七。

○松屋文集二卷、松屋文後集三卷はその文集にして、松の落葉四卷はその隨筆集なり。

一 胡蝶

○莊周が夢
昔者莊周夢爲胡蝶、栩栩然胡蝶也、自喻適志、與不知周也、俄然覺、則蘧々然周也、不知周之夢爲胡蝶、與胡蝶之夢爲周、與(莊子齊物論)

莊周が夢のうち、身をかへて、胡蝶となりきといへるは、もごりりそら言ながら、をかき故事にて、昔より、歌にも文にもつくりあへり。さるは、胡蝶といふもの、見るめもいと美しく、名さへにくからぬ故ぞかし。養蟲などになりたる夢がたりならば、かからむやは。花園には、はじめは、三つ四つと數ふばかり、稀に見えしも、いづくよ

りか來つらむ、數多になりて、空にさび、木がくれをゆく。あしたには露にぬれて、小き羽も重きにやあらむ、立ちかねて、なほ花びらにすがりて眠り居たるに、風のさと吹きくれば、驚きて、おのれも亂れ飛び、夕べにはねどころを争ふにやあらむ、こゝかしこの花にすだきて、たちゐひまなきが跳るやうに見ゆるなど、いとをかし。まして、やむごとなきわたりの前栽の花にすみて、玉簾ちかく飛びありきたらむは、あひあひて、ひたひつきも羽衣も、ひときはあてに、美しうぞ見ゆらむかし。

すべて、花さいへば、一つ二つ咲きたるをも、あながちにもごめ來てむつるゝは、あやしきすきものになむ。

二 夕立

いみじう暑き頃も、朝夕すゞみさといふことのありて、しばしが程

はいきのぶるわざなるに、あやしう、あしたより、またなく暑さの堪へがたき日なむありける。みな人、けふは夕立すべしとぞいふなるまことに、午の時過ぐる程けしきづきて、をち方の峯に、墨の色なる雲ぞたちのぼりたる。されど、いと遙かなれば、このわたりまでは降りも來じと思ひて、暑さのまぎらはしに手習などしつゝ、さる心もなきに、にはかに風吹き出でて、反故（甲）ども散らせば、こはいかにと驚きながら、走りありきてとりしたゝめなどする程には、や降り來て吹きいるゝ、雨の脚よこさまに、簀子などは、おどろくしう濡れわたりぬ。かみさへいみじう鳴りひらめけば、ものおぢするわらはべ女どもは、いたうわなゝき惑ひて、とばりのうちに隠れふして、耳ふたぎつゝ、いかさまにせむと思ひたるさま、いと心ぐるし。

からうじて、神なりやみぬれば、簀子のはしにゐざり出でて見るに、やゝ晴れゆく雲の末に、かすかなる光のほのめきたるは、さるお

そろしかりし名残もなく、いと涼しきながめなりけり。

三 伯夷叔齊

なが雨晴れ間なくて、つれづれなる頃、紫式部をまねぶにはあらねど、たゞ心やりのすさみに、かたへなる史記といふ書を一まき手にとりて見れば、伯夷が事をはじめに書きたる卷なりけり。

この人は、もとの根ざしいやしからず、孤竹といふ所を知りたる人の子なりとぞ。父なくなりて後、叔齊といふおとうとと、かたみに家をゆづりあひて、こゝにはあらしとて、ふたりともに立ち出でぬ。その程のこまやかなる事どもはもらしつ。かくて、思ふ心ありて、ともに西伯といふ人がり行きしに、その人ははやううせて、子なるをのこの、君をほろぼさむとて、つはものをあて出づる折なりしかば、その乗れる馬の前にたちて、いさめとせめしかども、聞かで、つひに

○紫式部を云々

紫式部宮仕せし後、實家に退出して、つれづれなる頃、夫宜孝の殘したる漢籍を讀みしこと、その日記に見ゆ

○史記

漢の司馬遷の著にして百三十卷あり、伯夷の事を書きたるは卷六十一、伯夷列傳なり

○この人は云々

伯夷、叔齊、孤竹君之二子也。父欲立叔齊、及父卒、叔齊讓伯夷、伯夷曰、父命也、遂逃去、叔齊亦不肯立而逃之、國人立其中子

○かくて云々

於是伯夷叔齊聞西伯昌善養老、盡往歸焉、及至、西伯平、武王載木主、踐爲文王、東伐、討、伯夷叔齊叩馬而諫曰、父死不葬、爰及干戈、可謂孝乎、以臣弑

君、可謂仁乎、左右欲兵之、太公曰、此義人也、扶而去之、武王已平殷亂、天下宗周

○かの二人は云々

而伯夷叔齊恥之、義不食周粟、隱於首陽山、采薇而食之、及饑且死、作歌、其辭曰、登彼西山兮、采其薇矣、以暴易暴兮、不知其非矣、神農虞夏、忽焉沒兮、我安適歸矣、于嗟徂兮、命之衰矣、遂餓死於首陽山

○怨みざりき云々

子曰、伯夷叔齊、不念舊惡、怨是用希

(論語公治長篇)

子貢曰、伯夷叔齊何人也、子曰、古之賢人也、曰、怨乎、曰、求仁而得仁、又何怨(同述而篇)

○なにかしが云々

余悲伯夷之意、睹軼詩、可異焉

君を殺してかはれるより、周の世とはいふなり。かくあるまじきよこさま事せしをだに、こごわりありげにいひなして、かしこの人どもは、皆よき事と思ふめるこそ、いとあさましき國のならはしなりけれ。

さるあしき國の人ながら、かの二人は、あやしくも、なほくたゞしき心にて、かゝる道なき世にはあらし、いはほの中にも住みてむとて、なにがしの山に入りて、下わらびを折りてすぎつゝ、しばしはめぐらひしかど、はてはては餓えて、いまはこなりける折、あはれなる歌を作りて、やがていたづらになりけり。おろかなるべき事にぞあらぬや。

その歌、世をうらみたる心ばへなるを、うらみざりきといひたるこそ、いと心えね。なにがしがあやしみたるも、げにこごわりぞかし。したの心とはたがひて、うへはつれなくさかしらするぞ、かの國人

のくせなれば、すぐれてかしこき人さへ、かゝるしひ言はいふなり。たごへその歌なくとも、時にあはずて、餓死ぬばかりからきめ見むには、いかでか怨めしからざらむ。それぞ人といふものの心にはありける。されば、神代の神たちも、うらめしき折は怨み、悲しきふしをば悲しませ給ひき。あはれ伯夷叔齊なども、めでたきわが大御國にうまれたらましかば、やすく楽しくて世をつくさましものを、そゞろに打ちなげかれて、書をば見さして、手習せしほぐのうらに、思ふ心かきしるしつ。

四 源氏物語小鑑序

この小鑑といふ書は、耕雲法師のあつめ書かれたるものにして、源氏の物語のあるやうをひとわたり心得むに、いとよき書なり。しかのみならず、卷々の歌など見おぼえて、本歌にさり出でむために

○耕雲法師

耕雲は花山院長親の號なり、後村上、長慶、後龜山三代に仕へ、從一位右大臣に進む、永享元年七月歿す

○本歌

先人の作歌を本として作りたる歌に對して、その先人の作歌をさし

○こたみ

文政七年夏のこと

○吉田なにがし

加賀屋善藏といひ、大阪心齋橋通の書肆松根堂の主人なり

もたよりあれば、歌よむうひ學びの人には、讀ませまほしうなむ。この書は、やうより板にゑりてはありつれど、なかばうせて後は、かくれて世に知られざりしを、こたみ、浪速のふみあき人松根堂のあるじ吉田なにがし、うせたるかぎりをゑらせこゝのへて、おのれにはし書をこゑふ。

そも、書のはし書よ、今やうは、たゞ飾りにのみそへたりと見ゆるもまじれれど、古のはみな、その書に見えたることの大むねを、さりすべていへり。これを見て、まづそのすぢを心得れば、讀みもてゆくにたよりありとて、書けるにぞありける。この書はかの物語のはし書ともいふべしといふは、やがてこれがはし書になむ。

五 論語

からぶみのも、ふみ千書あるが中に、ひとりぬけ出でて、いはむ

方なくをかしくめでたきは、この論語といふ書なりとこそ思はる。さるは、かしこき心のいたらぬ限なき孔子の身の行と、弟子に教へていはれたる言とをしるしたる書なればなり。人の身の行のあるべきやうを、こまやかに教へさとしたるさまは、天地のうち、又たぐひなかりけり。よきすぎとあしきすぎとは、たれも大かたは思ひわくなれど、その中に重さかろさのある心しらひの、人の知り得がたき境を、残る限なく、明かにいひさとし教へたる書にぞありける。

高尙、まだいと若かりし程より、身の行の心得にきて、をり／＼この書を読むたびに、その教をげにさることぞと思ひ信じて、いかでいかで、さやうにせばやと志して年経にければ、拙くてなし得ぬものから、わが身の爲となりぬる事の多かるは、たれも同じことぞと、人の爲をも思ひて、よその國の書なれど、これを読めとはず、むるになむ。

六 物學び

古と今とは、ことことなることも多かれど、物知れば、智といふものほゞ／＼に大きになれば、思ひはかりせまらずして、古か、りつれば、今はかう／＼してこそ、なみならぬをかしきかうがへも出で來ぬべく、よき人になるわざにしあれば、上なくたふさきものになむ。かくめでたきものなるを、鳥獸はすぐれたるもえせず、わくらはに人と生まれて、學ばでやはあるべき。

しかにはあれども、學びたるが、なか／＼に知らぬよりは、悪しきこともあり。おのが物知れる程を見え知られむとして、かりそめの言問にも、人のえ聞き知るまじきことをいひ、おももちけしきほこりに、人をばおとしめなごす。こはなま物知りの上にあることに

て、いご／＼にくげなりかし。
 人は心の底つよくて、うはべはものやはらかに、大かたのことは世になびきしたがひて、おのが立てたる趣ありても、あらはにけやけく人さひひ争はず、思ひのごめて、やう／＼にもものすべくなむ。かく心得て、ごゝの學びに、孔子の教をとりそへてもものしたらむには、つゆの難なく、わが身のためはさらにもいはず、世のためにもなることぞかし。物學びといふものは、する人の心得によりて、よしあし、いたく異なるものになむ。

清水濱臣

安永五年、江戸に生まる。不忍池畔に住し、家を泊酒舎と號す。世々醫を業とし、村田春海に師事して、國學歌文に長ず。文政七年八月歿す。享年四十九。
 ○泊酒文藻五卷はその文を集めたるものにして、泊酒筆話二卷は古學に関する隨筆集なり。

一 錦織齋の大人

世に歌よむ人おほし。あるはみじか歌にたくみに、あるは長歌にかしこく、あるは文かくわざにすぐる。世にいにしへ學びする人おほし。あるは御世々々の書をあきらめ、あるは四つのおきてぶみに委しく、あるはあがれる世の古言ぶみに心をふかめ、あるは後の世の物語ぶみを枕ごこす。その人々に問へば、かれに委しきはこれにおろかに、ごゝに思ひ入りたるは、かしこに心あさし。しかのみな

○錦織齋
 村田春海の號

○四つのおきて書
 昔の制度を記したる律令格式の書

らず、大和册子のうへには口さきらき、たるも、唐土書に向へば、爪くはるゝ、たぐひ多し。まこと、それもことわり、たれやし人かは、皆が兼ね備へたるあらむ。わが家の佛たふとぶとにはなけれど、うまぐこの道々に行きとほりて、よろづたごゝしからぬは、ひとり我が師錦織齋の翁のみなむおはしける。

翁、こゝの事は、すべて縣居の大人にさひきかれたるよしは、誰もよく知れることなればいはじ。もろこし學びは、はじめ服部仲英ぬしに名簿おくられしを、仲英ぬし身まかられては、鶴殿士寧ぬしにしたがひ、中頃都にのぼりて、皆川伯恭ぬしに問ひきかれしこと多く、又後には佐々木學儒、安達文仲などいへる。世にすぐれたる博士たちに、あしたゆふべ、むつびともなはれしかば、からうたにもその名きこえて、なまゝの博士、口あかすまじくなむおはしける。翁、世にもとむる心なくして、やむごとなき御前わたりに召さる

○縣居の大人
賀茂眞淵のこと、縣居はその家の號なり

○服部仲英

江戸の儒者にして詩に巧なりき、服部南郭の養子なり、明和四年六月歿す、年五十四

○鶴殿士寧

幕府の旗本にして儒者なり、服部南郭に學ぶ、安永三年十月歿す、年六十五

○皆川伯恭

洪園と號す、京都の儒者にして、書畫を善くす、文化四年五月歿す、年七十四

○佐々木學儒

吉田算墩のことなり、初め水戸侯の醫員たり、後江戸に來り、姓名を變じて儒となる、寛政十年九月歿す、年五十四、或は六十八と

○安達文仲

下野の人にして服部南郭の門人なり、詩を善くす、寛政四年閏二月歿す、年六十七

○芳宜園

加藤千蔭の號、千蔭は春海の同門の先輩なり

ること好まれず、たゞ花にあくがれ、月にうかるゝ、ほかには、朝夕文机のもと去らずおはして、筆さるわざにのみ明かし暮されしかど、ともすれば物學びする人のためにさまたげられ、かくすれば病の床におきふしして、思ふこといはでやまれたること少からず、書きさして事終へられざりしもの、數あまたなりき。

歌をのみたてても、のせられしことにはあらねど、おのづからこの方にて世に知られ、人に用ゐられつゝ、やう／＼天の下、たかきもみじかきも、老いたるも若きも、知る知らぬ、歌よむ人さだにいへば、千蔭、春海と口にいはざるものなきやうにはなりおはしにけり。その歌のすがた、芳宜園のをぢは、勢を、しく、詞はなやぎたるを好まれ、翁は、さびたるさまの、こまやかにしめやかなるふしを心させられにけり。文詞は、趣をもろこしにかり、言葉をこゝにうつし、ふることを求めず、ささび言をはぶきて、新しく一つのさまを思ひかまへら

れて、わきてめでたくなむものせられける。

世の人、翁をたゞに歌よみこのみ思はむも、翁を知らぬなるべく、又たゞに上つ代の學びするたぐひこのみ思はむも、翁を知らぬなるべく、又たゞに唐學びの博士なみにのみ思はむも、翁を知らぬなるべし。

翁若くしてなりはひの道にうとく、つひに家をはふらかして、百千の財を失ひ、はては事足らぬがちに年月を送られしかど、老いて後、言の葉に富み、學びに富まれたり。いでや、百千の財は、たゞしばし生けるが程の富なり。言の葉と學びとは、どこしへに亡きあごまでの富なり。翁財にまづしくおはせしかど、言の葉と學びに富まれたり。まことに天の下のたからの王とは、翁をこそいふべけれ。誰かは羨まざらむ、誰かは慕はざらむ。

○翁若くして云々
春海、性豪放にして財
利にうとく、終に家産
を失へり

○擣衣

二 擣衣を聞く

近しとさきけば、遠く、遠しとさきけば近し。しきるもたゆみ、たゆむも又しきる。雁がねの聲のきぬたをさそふにやあらむ、きぬたの音の雁のねに通ふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。そもこの音の悲しきか、住む里のさびしきか、うつ折のうきが故か。皆あらず、聞く人の心のわびしきなり。

三 埋火

いまし埋火に問はむ。いましよ、いづくの山に生ひ立てる木ぞ。いかなる山がつにあひてか、かくは伐り焼かれ、いかなるちぎりありてか、我が手にはならざる、ぞ。いまし、山がつにもあはで、心のまゝなる奥山中に生ひ茂らば、天つ齡をたもちて、幾百年の後にも安か

○小野
京都の西北、丹波の國境に近き山地にあり、古來木材薪炭を以て名あり

○侍従、黒方
何れも香の名

るべきを、あはれ宿世のはかなさよ。

埋火答へけらく、まごさぞ侍る、又さも侍らず。おのれ小野山奥に生ひ立ちて、こゝらの春秋を経ぬるものから、なら、くぬぎの世に捨てられたる木にて、桃梨のめでたき實も結ばず、櫻、海棠のなつかしき花も咲かぬ身なるを、若し伐り焼かれてかゝる姿ならずば、いかで宮殿のうちに召されて、火取の中にこりはやさされ、伏籠の下にかしづかれて、侍従、黒方などのえならぬ香にしむこと侍らむ。徒に谷の底、山の陰に朽ち果て侍らむよりは、ほまれある今の身には侍らずや。いかで、はかなきおのれこはのたまふぞ。

又、詰り問はく、あはれ、あいな、の榮えや、はかなのほまれや。いまし、今の姿となりては、灰の中に埋もれてあらむ程こそ、冬の一日ばかりはさてもありなめ、火箸もてかきあらはされなば、一時が間もながらふまじき命なるを、なにの頼み所ありてか、榮えこはせむ、なにか、り所ありてか、ほまれこはいはむ。はては火銷灰復死といふに至らじやは。

埋火、答ふべき言葉なくて、うはじろみて、灰の底におちいれり。

四 推敲

○推敲
唐の詩人賈島、一日、鳥宿池邊樹、僧推月下門の句を得たり、而して推字とせんか敲字とせんかに迷ひ、苦吟するも定まらず、遂に韓愈の言に聞きて敲字に定めたり

○我が師 村田春海

我が師は、常によみ出でらるゝ歌、いと遅吟にして、人の許にゆきて、そのむしろにのぞみてよまるゝ歌も、ある時は、今日はよみ得ぬなり。こて、ひめもす考へられたるまゝにて、空しく歸らるゝ。こご度度なりき。文詞なども、筆とられてより、幾度か稿をかへて、なほ心におちぬ程は、そのまゝ、廚子のうちに巻き入れおかれて、心のおもむけるをり、さう出ては、消し補ひなごせられしこと常なり。されば、みづから許して清書せらるゝに及びては、誤れることは、をさゝなかりしなり。

○荒木田久老
眞淵の門人にして、伊勢神宮の神官なり、文化元年歿す、年五十九

○俊頼口傳抄
源俊頼は堀河、鳥羽、崇徳の三朝に仕へし歌人にして、天治元年勅を奉じて金葉和歌集を撰す、その著口傳抄二卷あり

荒木田久老神主は、その心おきて大にここに於て、速吟なるのみならず、序文など、人に乞はれてものせらるゝをりなども、筆をとりて紙に向へば、詞腸忽ちに動くさて、案をも設けず、たゞちに筆を下されきとぞ。秀才なることは、ほめきこゆべきことなれど、さればこそ、その文詞、ともすれば、考へ足らぬことこのうちまじるをりもありしなれ。又、あまり筆の走るにまかせられて、深く考へらるゝまではなかりしこともありきとぞ。

今いづれをかよしといはむ。我が家の佛たふとぶごにはあらねど、俊頼口傳抄にもいはれたることありきその言葉に、歌をよまむには急ぐまじきなり。いまだ、昔より、とくよめるには、かしこきことなし。されば、貫之などは、歌一首を十日二十日にこそよみたれどあり。かく、いにしへ人のいひおかれたるを思ふにも、口さきのみすぐれたることはいひ難かるべし。しかのみならず、たとひ筆とりて

すなはち成れる文詞なりとも、その時こそ、いちはやき筆づかひをほめて、いさゝかの疵あらむも見ゆるしてはめづべけれ。後の世に傳はりたらむに、誰か、見る人毎にむかひて、この文は、案をも設けずものしたるなり。されば、いさゝかの疵はありぬべきことか。とは、ことわりいふ人のあらむ。その折は、たとひ、千度百度書き消し改むとも、疵なき玉とならむには、後の世に傳はりて、誰人もげにさめづべきものなるをや。

この劣りまさり、いかにかあるらむ。世の歌人のさだめいふ所きかまほし。

五 健康

我が師の常にいはれしは、契沖阿闍梨、縣居の翁などを、今の人の心よりは、四目兩口もありし人のやうに思へど、さらに今の人に異

○契沖阿闍梨
釋契沖は元祿頃の人に於て、近世國學の泰斗たり、阿闍梨は高僧の稱號なり

○本居氏 宣長

なるにはあらず。彼も人、我も人なり。みづから誇るにはあられど、契
 沖阿闍梨、縣居の翁、まのあたり本居氏などの如き、その才氣をたく
 らべば、我もこの三人に劣れりとは思はず、たえて及ばぬことは、三
 人の人たちは、精神すくやかにして、若きより老の身にいたるまで、
 學びの道に倦むことを知らず、きはめてつとめし人たちなり。我は
 幼きより、ほしいまま、に生ひ立ちて、物につとむといふことをなさ
 ず。一夜もまごろまずをれば、つとめては倦みつかれて、物のやくに
 立たず。一日つとめて二日物のやくに立たぬ故に、何事も、心に思ふ
 ばかりの事を、十が一つをもなしをへずして、いたづらに老いくづ
 ほるゝに至れるなり。これ、身の怠りといひながら、まことは、生ま
 れつきのかよわく、病におかざるゝこと常にして、物をつとむるに
 堪へぬが故なり。この三人の人たちは、つねに文机のものを離れぬ
 身なればこそ、人はさも思はね、學びの方にはなれたる身ならば、馬

追ひ、車貸しをわざとして、五月、六月のてりはたゝき、霜月、師走のふ
 りこほる頃に、はだしつるはぎにて、ひめもすに立ち走ることも、身に
 いたづき知らぬばかりのすくやかさにこそあるべけれ。されば、學
 びの道にも、何のわざにも、身のすくやかならぬは、よろづ口をしき
 ものぞかし、といはれき。今、濱臣が身の常にかよわく、病がらにて、學
 びの道にこそゆかぬにつけて、我が師の言葉思ひ出でらるゝこと
 常になむ。

六 富士の嶺の歌

富士の高嶺は、我が國のしづめともいひ傳へて、こそ山にすぐれ
 たることは、いひ出でむも今さらなることなりや。この山をよめる
 古歌、萬葉集よりはじめて、世々の勅撰、私集に入りたる名歌ども、あ
 げて數へつくし難し。いにしへはおきていはじ。ちかく水無瀬中納

○水無瀬中納言
 水無瀬氏成のこと、寛
 永二十一年歿す

言殿の富士百首といふものあり。その一二をいはば、

西の海やもろこしさして行く船のうへにも富

士はいくか見るらむ

忘れては空にも雪のつもるか見れば雲間に

はる、富士の嶺

これ等にならへる契沖阿闍梨の百首、長流隠士の三十首、いづれもめづらしく、巧によみなへられたり。縣居の翁の長歌殊にたへにして、人麻呂、赤人のにも、をさ／＼劣れりとは見えざる。縣居の長歌の反歌に、

駿河なる富士の高嶺はいかづちの音する雲の

うへにこそ見れ

富士の嶺の麓を出でてゆく雲は足柄山の峯に

かゝれり

○長流隠士

下河邊長流は大和の人にして、攝津に住せり、水戸光圀の爲に萬葉集を註釋せんとして果さず、貞享三年六月歿す、年六十三

○人麻呂赤人

柿本人麻呂と山邊赤人として、その作は萬葉集にあり

○足柄山

富士山の東、駿河と相模との國境にあり

また、紀行の中に、

いつの世のちりひびよりかなり出でて富士は

はちすの花と見ゆらむ

三首とも秀逸と云ふ。又枝直が歌に、

天のはら照る日のちかき富士の嶺に今も神代

の雪はこのこれり

芳宜園の歌に、

箱根路や神のみさかをこえきてもなほ富士の

嶺は雲ありけり

なご、よき歌と、人もいひあへり。我が師の歌に、

心あてに見し白雲はふもごにて思はぬ空には

る、富士の嶺

この歌、さまでの秀逸とも思はざりしに、いにし文化四年、おのれ、

○枝直

加藤枝直は加藤千蔭の父なり

○熊坂 修善寺温泉の北方にあり
 ○竹村茂雄 本居宣長の門に入り歌文に長ず、弘化元年十二月歿す、年七十六
 ○熱海 伊豆國の東北部にあり
 ○弦卷山 熱海の西南にあり

伊豆のいでゆあみがてら、熊坂の里なる竹村茂雄がもごへこ心ざして旅だてる頃、熱海のいでゆを出でて、弦卷山の頂にかゝりしに、浮雲、西の空にたちかきなりしかば、ごもなへる人に向ひて、富士はいづくの雲のあなたにかあたりて見ゆる」と問ひしに、はるかに指ざして、あしこの雲のうちこそ「ごいふ程、いつしか浮雲はれのきけるに、その指ざしをしへたる雲よりは、はるかに高く空に聳えて、ふりあふぎ見るばかりなりしかば、さてその時ぞ、師の歌を思ひ出でて、めできこえたりき。

中島廣足

寛政四年、熊本に生まる。樞園はその家の號なり。本居宣長の養子大平に學びて歌文に長ず。始め長崎にあり。六十五歳京都に上り、尋いで大阪にあること五年。七十三歳、藩侯に召されて國學師範役となる。文久四年正月歿す。享年七十三。
 ○樞園文集はその文を集めたるものなり。

一 閑中春雨

花ざかりはさらなり、さらでも、柳など青やかにうち煙り、うらうらと照りたる日は、蕨、土筆などいかならむと、野山のさまのみ、こひしう思ひやられて、庵のうちには籠り居がたきを、人さへゆくりなく訪ひ來つ、近きわたりまでいざ／＼など、そゝのかすめり。
 雨の降る日は、さることも思ひ絶えて、人はた音づれねば、文机ふづくらにのみより居たる、なか／＼にをかしうなむ萱ふける軒は、雨の音靜

かにて、池水のあやこまやかなるに、いと深う霞める梢より、翅しを
れたる鳥ごもの、そこはかこなく飛びわたるなど、いといたうをか
し暮れぬれば、ましていとしめやかにて、見る書さへ、今ひときは心
しみぬ。風少し吹き出でて、燈臺の火のまたゝきたるに、何とも知ら
ぬ花の香のほのかにうちかをりをりたるなごもをかし。

二 蚊遣火

晝のほどの暑けさは、水の上さへむごくにて、いと堪へがたかり
しを、やうく日影もかたぶきて、木の間よりそよぎ出づる風のい
と涼しきに、ゆあみなごして立ち出づれば、月の影さへほのめきて、
晝の苦しきも、かつくわすられぬ。

やゝ遠く行くほど、道の傍なるしづが伏屋より、烟のいとしげく
立ち上るは、蚊遣ふすぶるにやと思ふに、大きな火桶に、何にかあ

らむ、青やかなる木の葉をいと多くさし入れて、こなたかなたあふ
ぎちらすは、いとあつかはしく、見る目もいぶせて、急ぎ歩みすぎ
て見れば、やうく薄らぎ行く烟の、杉の梢にたなびきたる、霞おぼ
えてをかしきに、かはほりさへ三つ二つ飛びかひたる、繪にもかか
まほしきけしきになむ。

三 夏の旅

晝のまは、暑さ堪へがたくて、はかしくしうもえあゆまねば、朝影
の程にこそはこて、鳥の聲こともに起き出でてゆくに、有明の月く
まなく澄みわたり、並木の松風涼しく吹き通りて、ほろくここぼ
るゝ露の袂にかゝれるも、いと心地よし。

道のかたへなる田面に、人の音なひのするを、なにかこ見れば、
車の上へのぼり居て、水踏み入るゝなりけり、夜さへかゝるわざす

るは、いかばかりかは苦しからましと思ふに、わが旅のうさも聊かなぐさみぬ。

程なく明けゆく横雲の空に、山鴉飛びわたりつゝ、茅蜩の鳴き出でたるなど、いみじうをかしきに、稻葉の露の所せきまで置きわたしたるが、葉末にのぼりてかつくゝこぼるゝさま、見る目もいと涼しくおぼゆ。さし出でたる日影のやうくゝ高くなりゆくに、けふ越ゆべきなにがしの山路思ひやるも、まづいと苦しう。

四 幽夕

遠山寺の入相の鐘、時にかへるむら鴉も、いつしか聲しづまりて、向へる書もやうくゝ見えなくなりゆくに、おもしろきわたりは今しばしなるものを、いと口をしく、障子ひきあくれば、夕月の影かすかにて、ほのきりわたれる梢どもの、あはれに見やらるゝに、青鷺こ

かやいへるが、あやしき聲に鳴きゆくめる、たゞこの上を過ぎぬこ覺ゆるに、をさなき子のあそび居たる、めのだなどの呼ぶをも聞かぬが、この鳥の聲におびて、家のうちに走り入りぬめり、道行く人のおこなひも絶えて、いたうしづけきに、ごもし火もてきたるこそうれしけれ。

五 驛

をさまれる世は、驛路のゆきかひも賑はしく、人やごす家はた建ちつゞきて、草引き結ぶ思もなきものから、さすがにうち解けてしも寝られぬは、旅路のならひなるべし。暁の鐘は、いづこも同じ響にて、いとく立ち出づる旅籠馬のこゑくゝ、枕がみに聞えて心地よげなるに、今日は天氣もよかなり。何がしの浦の眺め、いかにをかしからまし。かしこの御社にも、こたびこそは「なごいひつゝ、そゝき

おくる音のほのかに聞ゆるは、あなたに寝たる旅人なるべし、家なる人々も起き出でて、朝げのこごなど、ごかくまかなひありく程、やうやう物さわがしくなりて、物になひ行く男どもの鄙、唄うたふなど、忙はしげに聞ゆ。ごばかりありて、門のもごに引き寄せつゝ、馬まゐりて候。ごいふは、わが乗るべきにやご思ふもいごをかし。

六 漁村

海人の住みかばかりあはれなるものはなし。いごたよりなき海邊の、風もたまらぬ松蔭などに、唯かりそめに造りたる藁屋ごものさま、浪うちよせなば、やがて流れもうせぬべう、いごはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なか／＼にをかしきものから、さてすまひなば、何心地かせましご、思ひやるだに心細し。

夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが、磯邊に立ち

○くゞつ
蕨にて編みて作れる袋
の如きものなり

て、今日はいご遅くもあるかななどいひつゝ、沖の方をまもりをり。うまごごもにやあらむ、真砂の上を走りありきつゝ、遊び居たるに、入日さしたる島蔭より、三つ二つ歸りくる舟のほこらしげなるを、老人待ち得顔にうちほゝゑみたるは、さち多かりしにやご見ゆ。渚によせて飛びおるゝまゝに、綱くり寄せなど、ごかくしつゝのゝしるに、男も女も數多出で来て、大きな籠に、魚ごもごり入れつゝ、擔ひもて行くさま、さはいへご賑はしげなり。くゞつめく物もて来て、ちひさき魚三つ四つ乞ひもて行く童などもあり。すべて、人多く立ちこみ騒ぎて、舟のあたりかしがましく、さし寄りて覗くべうもあらず。いご長き網の渚にかけ干したるを、繰りためて取り入れなど、やう／＼静まりゆけば、ごなたかなた、火ごもしたる透影さへもあらはにて、いごあはれに見ゆ。

一夜宿りてみれば、浪風の響枕をゆすりて、露まごろまれず。曉方、

隣の家々目さまして、なりはひの事どもなるべし、あやしう聞き知らぬ事どもを、おのがじし聲高にいひかはしたる、げに海人のさへづり、珍しうもをかしうも。

七 岸頭待舟

いとよき折かなとて急ぎくるに、岸さし放ちたるこそ、いみじう口をしけれ、なほしばし、なほしばし。今一人乗せてよ、いふく、走りくるもあるを、聞かぬ顔して漕ぎ行くうしろでは、いこにくきものから、さのみ漕ぎ返したらむには、え堪ふまじくやと思はるゝを、「あなにくの船人や。いたづらに人を走らせて、腹あしげにいひたるこそ、心なくは見ゆれ。かたへの石に尻かけて見やれば、蘆間さほくさし分けゆくを、かなたの岸にも、待遠なるけしきに、たゞずみたる人あり。水上よりさしくだす筏のさまの、いと靜かなるに、中洲の

わたりには、ちひさき舟つなぎて、四手さかいふ綱さしおろして、かくするなど、いとをかしく、一日もかくて見まほしう覺ゆ。おくれたる人々、つぎく、來あひて、立ち待つ程、やうく、漕ぎもて來たるこそうれしけれ。

八 夜學

寺々の初夜の鐘のひゞきもをさまりて、皆人もねたるに、いとうれしう、ごもし火あかくしなして、文机にうち向ひたる、いみじう心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知られて、ふかき心ばへあるくだりくも、おのづから解き得らるかし、挑げつくしても、なほねぶたさも知らず、油さしそへつゝ、見もてゆくに、遠き世の人も、たゞさし向ひ語らふ心地す。冊子ちしつくりて、をかしきふし、あるはふと思ひ得たることなどをば、墨おしすりつゝ書

○初夜
夕方より夜半までをいふ

きつけなどするもをかし。鳥の聲は夜深きにやと思ふに、いごごく明けはなれたる、しばしとてうちねぶる夢のうちも、あだし事ならむやは。

九書

夏の日の暮れがたきをも知らず、冬の夜の長きをもおぼえぬは、書見る心の楽しさになむありける。さるは、道々しきすぢのはさらなり、家々にしるせる何くれの書、又かりそめの筆ずさびなど、からやまご、いにしへ、今ご、いごさま、多かる中に、わが立てたるすぢならぬも、見もてゆくまゝには、えうある事ごもありて、かにかくに飽かず面白く楽しきは、書にしくものまた無かりけり。
遠き世のを見るほどは、われもその世にある心地して、やがてその人々を友ごなしてうち語らふ心地さへせらるゝを、われも筆ご

○鈴屋の翁
本居宣長

りて、よしなしごごごも書きつくるが、たまゝも散りぼひ残りて、後の世に傳はらば、今のいにしへを見るが如く、後の人はた我を友ごせむには、千ごせの末にさへ知る人ある心地して、いごをかしくなむおぼゆる。

よろづの心やれるわざ、いごさはなれご、たゞ一人ゐて、飽かず樂しきは、書の外に、又何かはあらむ。あるが上にもあらまほしきは書なりけり。鈴屋の翁のいはれたるは、げにさるごごにこそ。

近世名家擬古文新抄 終

近世名家擬古文新抄年表

皇紀	元號	年次	事	讀
二三四	貞享	三	六月、下河邊長流歿す、享年六十三(一二四頁)	
二三三	元祿	五	釋契沖の古今餘材抄、百人一首改觀抄、勢語臆斷等成る、時に五十三歳(一三三頁)	
二三七	同	一〇	賀茂眞淵遠江國に生まる(一頁四二頁)	
二三六	同	一四	正月、釋契沖歿す、享年六十二(一三三頁)	
二三九	享保	一五	本居宜長伊勢國に生まる(七頁)	
二三三	同	一八	眞淵京都に上りて荷田東麻呂に國學を學ぶ、時に東麻呂六十六歳、眞淵三十七歳(一頁二四頁)	
二三五	同	二〇	加藤千蔭江戸に生まる(三六頁)	
二三六	元文	元	七月、荷田東麻呂歿す、享年六十九(四一頁)	
二三九	同	三	眞淵江戸に下りて子弟を教ふ、時に四十二歳(一頁四二頁) 富士谷成章生まる(三三頁)	
二四〇	元文	五	宣長の父歿し、宣長の義兄定治繼ぐ、宣長時に十一歳(一三三頁)	
二四五	延享	二	九月、眞淵遠江に歸省す、時に四十九歳(一頁)	
二四六	同	三	眞淵、田安宗武に聘せらる、時に宗武三十二歳、眞淵五十歳(一頁一五頁四二頁) 村田春海江戸に生まる(四五頁) 荒木田久老生まる(二〇頁)	
二四八	寬延	元	契沖の百人一首改觀抄出版せらる、契沖歿後四十七年(一三三頁) 千蔭、眞淵の門に入る、時に十四歳(四〇頁)	
二四二	寶曆	元	宣長の義兄定治歿す、宣長時に二十二歳(一三三頁)	
二四三	同	二	三月、宣長京都に上り、儒學を堀景山に學ぶ、時に二十三歳(七頁一二頁)	
二四三	同	三	石川雅望江戸に生まる(六四頁)	
二四四	同	四	宣長、醫術を武川幸順に學ぶ、時に二十	

二四七	寶曆 七	十月、宣長伊勢國松坂に歸りて醫を業とす、時に二十八歳(七頁一四頁) 眞淵の冠辭考成り、尋いで出版せらる、時に六十一歳(一四頁)
二四八	同 八	松平定信生まる(七三頁)
二四九	同 一〇	十一月、眞淵致仕す、時に六十四歳(一頁四二頁) 石原正明尾張國に生まる(九三頁)
二五〇	同 一三	五月、宣長、眞淵に會ひ、尋いで入門す時に眞淵六十七歳、宣長三十四歳(七頁一六頁) 千蔭、父枝直の職をつぎて與力となる、時に二十九歳(六一頁)
二五一	明和 二	藤井高尙備中國に生まる(一〇三頁)
二五二	同 四	宣長、古事記註釋の稿を起す、時に三十八歳(七頁) 三月、富士谷成章のかざし抄三卷成る、時に三十歳(三三頁) 六月、春海の師服部仲英歿す、享年五十四(一一四頁、四二頁)
二五三	同 五	富士谷御杖りまら(三四頁)
二五四	同 六	十月、賀茂眞淵歿す、享年七十三歳(一頁四二頁)
二五五	同 八	八月、宣長、田安宗武歿す、享年五十七(一五頁)
二五六	同 二	富士谷成章のあゆひ抄五卷成る、時に三十六歳(三三頁)
二五七	同 三	定信、奥州白河の城主松平定邦の嗣となる、時に十七歳(七三頁) 春海の師鶴殿士寧歿す、享年六十五(一一四頁)
二五八	同 五	清水渚臣江戸に生まる(一一三頁) 麻疹流行し、石原正明病む、時に十七歳(九九頁) 成章のあゆひ抄出版せらる、時に四十一歳(三三頁)
二五九	同 八	十月、富士谷成章歿す、享年四十一(三三頁)
二六〇	天明 三	松平定信封をつぐ、時に二十六歳(七三頁)
二六一	同 五	加藤千蔭の父枝直歿す、享年九十四、千蔭時に五十一歳(五頁一二五頁)
二六二	同 六	宣長の古事記上卷の傳十七卷成る、時に五十七歳(七頁)
二六三	同 七	六月、定信老中となる時に三十歳(七三頁)
二六四	同 八	千蔭家職を辭す、時に五十四歳(六一頁)
二六五	同 三	宣長の美濃の家づと成る、時に六十二歳(五五頁) 二月、千蔭萬葉集略解の稿を起

二四二	明和 八	田安宗武歿す、享年五十七(一五頁)
二四三	安永 二	富士谷成章のあゆひ抄五卷成る、時に三十六歳(三三頁)
二四四	同 三	定信、奥州白河の城主松平定邦の嗣となる、時に十七歳(七三頁) 春海の師鶴殿士寧歿す、享年六十五(一一四頁)
二四五	同 五	清水渚臣江戸に生まる(一一三頁) 麻疹流行し、石原正明病む、時に十七歳(九九頁) 成章のあゆひ抄出版せらる、時に四十一歳(三三頁)
二四六	同 八	十月、富士谷成章歿す、享年四十一(三三頁)
二四七	同 三	松平定信封をつぐ、時に二十六歳(七三頁)
二四八	同 五	加藤千蔭の父枝直歿す、享年九十四、千蔭時に五十一歳(五頁一二五頁)
二四九	同 六	宣長の古事記上卷の傳十七卷成る、時に五十七歳(七頁)
二五〇	同 七	六月、定信老中となる時に三十歳(七三頁)
二五一	同 八	千蔭家職を辭す、時に五十四歳(六一頁)
二五二	同 三	宣長の美濃の家づと成る、時に六十二歳(五五頁) 二月、千蔭萬葉集略解の稿を起
二五三	寛政 四	中島廣足熊本に生まる(一二七頁) 春海の師安達文仲歿す、享年六十七(一一五頁) 十二月、宣長の古事記中卷の傳十四卷成る、時に六十三歳(七頁) 石原正明宣長の門に入る、時に三十三歳(九三頁一〇〇頁)
二五四	同 五	宣長、正月より玉かつまを書き始む、時に六十四歳(七頁) 藤井高尙、宣長の門に入る、時に三十歳(一〇三頁) 七月、定信老中の職を退く、時に三十六歳(七三頁)
二五五	同 六	宣長、玉かつま三卷を出版す、十月紀州侯に聘せらる、時に六十五歳(七頁)
二五六	同 八	千蔭、萬葉集略解を脱稿し(五二頁) 卷一より卷五までを出版す、時に六十二歳(五三頁)
二五七	同 九	宣長玉かつま三卷を出版す、時に六十八歳(七頁) 塙保己一の長男寅之助歿す、享年八(一〇〇頁)
二五八	同 一〇	六月、宣長の古事記下卷の傳十三卷成る
二五九	寛政 二	千蔭、萬葉集略解の清書を終る、時に十六歳(五二頁)
二六〇	同 二	九月、本居宣長歿す、享年七十二(七頁) 石原正明の年々隨筆第一、二卷成る、時に四十二歳(九三頁)
二六一	同 二	七月、千蔭のうけらが花七卷の編成る、時に六十八歳(三六頁) 雅望のしみののみか物語二卷出版せらる、時に五十歳(六四頁) 正明の年々隨筆第三卷成る、時に四十三歳(九三頁)
二六二	同 三	江戸に麻疹流行し、塙保己一の次男道之助歿す、享年二(一〇〇頁) 正明の年々隨筆第四卷成る、時に四十四歳(九三頁) 荒木田久老歿す、享年五十九(一一〇頁) 正明の年々隨筆第五、六卷成る、時に四十五歳(九三頁)
二六三	同 三	七月、賀茂翁家集五卷出版せらる、眞淵

二四七	文化	四	春海の師皆川伯恭歿す、享年七十四(一一五頁) 清水濱臣、竹村茂雄を訪ふ、時に濱臣三十二歳、茂雄三十九歳(一二五頁)	二四三	文政	六	十二月、富士谷御代歿す、享年五十六(三四頁)
二四六	同	五	九月、加藤千蔭歿す、享年七十四、うけらが花第二篇七卷出版せらる(三六頁六〇頁) 濱臣の泊筆筆跡成る、時に三十三歳(一一三頁)	二四四	同	七	夏、藤井高尙、源氏物語小鑑に序す、時に六十一歳(一〇九頁) 八月、清水濱臣歿す、享年四十九(一一三頁)
二四二	同	八	二月、村田春海歿す、享年六十六(四五頁)	二四九	同	一二	五月、松平定信歿す、享年七十二(七三頁) 高尙の松廼落葉成り、出版せらる、時に六十五歳(一〇三頁)
二四七	同	九	宣長の玉かつま八卷出版せらる、歿後十一年にして出版完成す(七頁) 松平定信退隠す、時に五十五歳(七三頁) 千蔭の高集集略解の出版完成す、歿後四年(五三頁)	二四〇	同	一三	正月、石川雅望歿す、享年七十八(六四頁)
二四三	同	一〇	十一月、春海の琴後集十五巻の編成る、歿後二年(四五頁)	二四二	天保	三	正月、柳千古歿す(五四頁) 四月、高尙の松屋文後集三巻出版せらる、時に六十八歳(一〇三頁)
二四四	同	一一	春、藤井高尙の松屋文集二巻出版せらる、時に五十歳(一〇三頁)	二五〇	同	一二	八月、藤井高尙歿す、享年七十七(一〇三頁)
二四六	同	一三	津淵の門人安田躬弦歿す(四九頁)	二五六	安政	三	中島廣足京都に上る、時に六十五歳(一二七頁)
二四二	文政	四	正月、石原正明歿す、享年六十二(九三頁)	二五二	文久	元	廣足、熊本侯に召されて國學師範役となる、時に七十歳(一二七頁)
二四二	同	五	正明の師塙保己一歿す、享年七十七(九三頁)	二五四	同	四	正月、中島廣足歿す、享年七十三(一二七頁)

昭和二年八月十日訂正再版印刷
 昭和二年八月十三日訂正再版發行

定價 金參拾五錢
 昭和貳年度
 當時定價 金六十錢



著者權所有

◎抄新文古誕家名世近◎

編者 藤井乙男
 編者 山脇毅
 發行者 博多久吉
 印刷者 堀越幸

東京市神田區錦町三丁目拾二番地
 大阪府西區阿波座二番町壹番地
 日本印刷製本株式會社

發行所

大阪府南區大寶寺町西之丁二一十二番地
 電話南一七七七番・振替大阪七三三三番
 東京市神田區錦町三丁目拾二番地
 振替東京五二六〇七番

博多成象堂

308
688

在廣州府城西關

廣州府城西關



廣州府城西關
廣州府城西關

終

